

のんびり

02 non-biri
2012 Autumn



ユタカな国へ
びあきた
びじんた

ATTAVISION

TAKE FREE



秋田県大仙市大曲地区

この写真

合成じゃありません！

8月25日、快晴。今回のんびり撮影隊がやってきたのは、秋田県大仙市大曲地区。日本のトップレベルの花火師たちがその技を競う「全国花火競技大会」当日のことでした。「大曲の花火」として有名な、この大会は、第二次世界大戦による中断を経たものの100年以上の歴史を持つ由緒ある花火大会。いつもはのんびりした大曲の町も、この日だけは毎年70万人以上の観客が訪れます。

そんな状況での撮影は不可能とも思われた中、奇跡的に絶景ポイントの休耕田をお借りできることに。と、そこにかけてくれたのは、小野小町の生誕地である湯沢市雄勝の「小町娘」たち。さらに、日本三大盆踊りの一つ「西馬音内盆踊り」の踊り手の母娘が、美しい端縫い衣裳と彦三頭巾で、妖艶な手踊りを再現。さらに、秋田国際タリア園の鷺沢幸治園長が、丹精こめて作ったダリアを惜しげもなく提供してくださりました。

まさに、花！花！花！の秋田の美の競演。これらを一枚の写真に収めようというのだから、それはもう一大事！大輪の花火が続々打ち上げられるなか、カメラマンの浅田政志が必死の撮影。その模様の映像は、ぜひ、のんびりサイトでご覧ください！



のんびりしたいは
みんなのきもち
のんびりできるは
ゆたかなあかし
のんびりまつすぐ
秋田のくらし

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。
その豊かさが秋田の実直なもののづくりを支えてきました。
そして同時に、秋田の人々のなかには
大らかで力強い「のんびり」精神が育まれました。

そんなのんびり秋田は
右肩上がりの経済成長というゴールなきゴールに向かい
懸命に走ってきたニッポンにとつて
まるでビリを走るランナーのように映っていたかもしれません。
けれど世の中は変わりました。

順位など気にせずのんびり歩いてきたことが
まさに「のんびり」となる時代がやってきました。
日本人の多くは今、
うまい飯が食べられて
うまい酒が飲めるという
当たり前の豊かさについて考え直しています。
しかし秋田では昔も今も、ずっと
それが人々の暮らしの真ん中にありました。

ビリが一番だ。上だ下だ。と
相対的な価値にまどわされることなく
自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。
そんなニッポンのあたらしい「ふつつ」を
秋田から提案してみようと思います。



今号の「あきたびじん」ぶつ相関図

秋田で暮らす美しき人々＝あきたびじん

山形県

与次郎きつね
紙芝居



千葉美栄さん

千秋公園
与次郎稲荷神社



伊藤洋子さん

大川寺寺務



佐藤敏雄さん

東根市
与次郎稲荷神社



山口健策さん

師弟!?

手ぬぐいのご縁

親子



佐藤瑞子さん



音央くん



音寧ちゃん

笹尾千草



矢吹史子



県外メンバー



藤本智士



浅田政志



広川智基

編集
チーム

スタタカミツ

澁谷和之

田宮慎

秋田メンバー

Contents

1 のんびりまっすぐ秋田のくらし

4 特集 秋田「よじろういなり?」

6 第3章 きつねと殿さま。

14 第3章 与次郎稲荷のいま。
ほかにもあります 秋田の『伝説』

22 第3章 山形県の与次郎稲荷。
こんなにあります 秋田の『湧水』

30 第4章 のんびり版「よじろういなり」
よじろうのんびり

37 写真家 浅田政志の 撮らずにはいられない!!
第2回/西馬音内盆踊り

38 下戸式秋たんぼう 福田利之
第2回/男の中の男鹿探訪

43 秋田のブレないブレッド

48 AKITA ACCESS MAP

55

62

秋田

「よじろっついななり？」

取材文 藤本智士 写真 浅田政志・広川智基・鈴木竜典
Text Satoshi Fujimoto Photo Masashi Asada, Tomoki Hirokawa, Ryusuke Suzuki



「与次郎」
かいち マスコットキャラクター

通一丁目地区市街地再開発組合

本誌『のんびり』の編集チームは、僕のように県外からやって来るメンバーと、県内のメンバーが一緒になって構成されています。今号の特集を決める編集会議の場で、僕はちよっとした疑問を県内のみんなに投げかけました。「最近、駅前がよく見るきつねのキャラクター。あれ何？」まさかその一言が、あんな大変な旅に繋がるとは……。

秋田 〓 きつね？

本誌『のんびり』の制作がスタートして、幾度となく秋田に来るようになって僕の目に、やたらと飛び込んでくる、飛脚の姿をした凛々しい顔のきつね。秋田市の中心部にこの夏オープンした『エリアなかいち』のマスコットキャラクター。美術館や各種商業施設が立ち並ぶ再開発エリアを盛り上げるべく生まれたそのキャラクターの何が気になったかって、そのモチーフが、「きりたんぼ」でも「なまはげ」でもなく、「きつね」であることでした。秋田 〓 きつね？ なんて？ しかも飛脚？ どういうこと？ 疑問に思った僕は、冒頭に記したように、県内メンバーのみんなに質問してみたのです。そこではじめて耳にした「与次郎稲荷伝説」という言葉。その言葉に僕はさらにひっかかりました。僕たちののんびりチームが編集会議をする、秋田市榑山登町にある事務所の道を挟んだすぐ目の前に、小さな神社があるのですが、その神社の名前がまさに『与次郎稲荷神社』。もともと神社好きな僕は、当然のように

のんびり事務所の前にある神社のことも気になっていました。「じゃあ、ひよっとしてその与次郎稲荷伝説と向かいにある神社は関係あるの？」とさらに質問する僕に、結構なドヤ顔で「あるんです」と答える、県内編集チームリーダーのヤブちゃん。その言い方、あれでしょ？ あのサッカー解説者の……うろくくん 誰だっけ？ なんて思いつく隙もなく「たまにそこで、与次郎稲荷伝説の紙芝居をやってもらったりしてるんですよ」と続けるヤブちゃん。「え？ 紙芝居？ 見たい！」そこで僕は閃きました。今回の特集は「与次郎稲荷伝説」を柱にしてみよう。再開発で盛り上がる秋田市のメインキャラクターになるくらいですから、きつね「与次郎稲荷伝説」には、秋田の人たちが大切にしているメッセージがあるはず。そう感じたのです。そのためには、まずその伝説を知らなきゃいけません。その場で教えてもらうことはやめました。いま聞いてしまうよりも、県外メンバーが大集合する取材初日の朝に、全員で紙芝居を見て、一緒に「与次郎稲荷伝説」を知りたいと思ったのです。



7月
24日朝

いよいよ特集取材初日の朝。前日に秋田入りした県外メンバーと県内のメンバーあわせて、総勢10名が秋田市檜山にある、『のんびり』事務所向かいの与次郎稲荷に集合しました。もちろん紙芝居を見るためです。紙芝居をしてくださるのは、秋田県内の観光地ガイドをされているボランティアグループ『秋田癒しの旅サポーター』代表の千葉美栄さん。県内編集チームリーダーのヤブちゃんが主体となって、毎月最終日曜日に檜山界隈で開催している『ならやま日曜はしご市』というイベントに、旅サポーターのメンバーの方が時々参加して下さって、与次郎稲荷の境内で紙芝居をしているとのこと。約束の午前10時。千葉さんは風呂敷で包まれた紙芝居セット一式を抱えて、やってきてくれました。それは、与次郎稲荷伝説をわかりやすく伝えるために、千葉さんが作られた紙芝居『与次郎きつね』を一緒に見てみましょう。

さあ、はじまり、はじまり



秋田「よじろういなり?」 第3章

きつねと殿さま。



『与次郎きつね』

与次郎というきつねと殿様の話です。むかしむかし千秋公園がまだ神明山と呼ばれていたころのお話。

神明山は、峰々が続く三森山のひとつでした。そこには、大ききつねを頭に、たくさんのきつねが住んでいました。まだ近くには家も少なく、きつねたちは自由に楽しく毎日を暮らしておりました。

ある時、茨城県、常陸の国から秋田にきたお殿様が、この神明山にお城をつくることになりました。その準備を始めたことを知ったきつねの代表が「どうか私たちのすみかを取り上げないでください。お城の隅でもいいので私たちの居る場所を残してください」とお殿様にお願ひしました。「よし、わかった。それでは、お城の薬を



作るための葉草畑の近くに茶畑をつくるから、その茶守番をしてもらえるなら、そこに住むことを許そう」と優しいお殿様は約束をしました。

お城が出来てきつねたちは、奥の茶畑へと引越しをして、今まで以上に楽しく暮らしておりました。きつねたちは「こんな優しいお殿様のために何か役に立つことはないかなあ」とみんなで相談したところ、「そうだ! 私たちは走るのが得意だから、江戸までの手紙を届ける飛脚になろう」ということになりました。

お殿様も大変よろこんで『与次郎』という名前をつけてくださいましたので、江戸と秋田を往復たった6日ですと走って、お殿様の手紙を運びました。江戸は今の東京のことです。その頃ふつうは14日くらいかかったそ



の話聞いてから、「与次郎は私のためにそんな目にあつたのか」と悲しみ、お城の一番良い場所に稲荷神社を建てて毎日お参りしたそうです。それからお城の人々はこの神社を『与次郎稲荷神社』として大切にしていきました。今、千秋公園にある赤い鳥居がたくさん建っている神社がその稲荷神社です。商売繁盛や縁結びにもご利益があり、鳥居の数も年々増えています。今でも人々は豊作の神様としてお参りしています。

お城には、いつも殿様の幟旗を持つ『旗組』という役人がいましたが、その人たちの住んでいた『榎山登町』にも『与次郎稲荷神社』があります。これは、与次郎が手紙を届けるのを見送り、感心してかわいがった役人たちが、与次郎の供養のために自分たちの住む町にも建てたものだと言われています。殿様のために働いた与次郎ぎつねは、今でも千秋公園に時々黒い手甲脚絆のしるしがあるきつねとなつて現れるそうですよ。どんな動物でも必ず世の中の役に立つためにいるのですから、かわいがってあげましょうね。お殿様にかわいがられた与次郎ぎつねのお話でした。おしまい。

うです。

飛脚に化けた与次郎は他の飛脚の半分も早く手紙を届けたのです。いつもなら山形で休んでいたのに宿もとらずに走り帰ったので、山形の飛脚宿の主人、間右衛門は不思議に思い「これはきつと、きつねが化けているに違いない」と狐師の谷蔵と罫を仕掛けることにしました。何も知らない与次郎はいつものように走っていたら、道に大好きな油揚げが落ちていたので、思わず手を出したところ、「ああーっ!」待ち構えていた狐師の谷蔵の罫にかかってしまいました。

「やつぱりきつねだった!」と与次郎は縄をかけられ宿まで連れて行かれてしまいました。与次郎は「どうか、秋田の殿様に手紙を届けるまで殺さないで……!」と頼んだのに、間右衛門と谷蔵は与次郎をきつね汁にして「うまいうまい」と食べてしまい、またその村の人たちにも食べさせました。

その夜、きつね汁を食べた村の人たちは「ああ痛い、痛いよ!」と全員お腹が痛くなり、駆け回って苦しみました。「これはきつときつねのたたりだ」と言いだし、村の人々は与次郎

の恨みに駆け回って「ごめんなさい! 助けて!」と泣き叫んでいましたが、なかなか病気は治りそうにもなく、だんだん痩せて顔色も悪くなっていきました。

地元の山形のお殿様がその話を聞いて大変心配をし、「東根」というところ



ろに大きな鳥居の稲荷神社を建てて供養したところ、村人の病気は嘘のように治り元氣を取り戻しました。でも、宿屋の間右衛門と狐師の谷蔵はそのまま苦しみながら死んでしまいました。与次郎が許さなかつたのでしょうか。

秋田のお殿様は帰ってこない与次郎



一同 (拍手)

千葉 こんなストーリーなんです。

藤本 へえー。じゃあ、出てきた神社がまさにここ榎山の……

千葉 そうです。ここが登町ですからのぼりっていうのは幟旗ののぼりね。

ここ榎山の地区は、江戸時代ゆかりの地名がすくく残っていたところなんです。今はだいたい変わりましたがね。

藤本 そうなんです。ちなみに、その紙芝居の枠って手作りですか?

千葉 これ、ペニヤをはっておじさんたちが作るのよ。買えばね、ボタンと閉じられるいいのがあるのね。

藤本 いやいや、これがいい。
千葉 ほんとにうち(秋田癒しの旅サポーター)のおじさんたち何でも作る人たちだから。人使いの荒い、ばばね。

一同 (笑)

矢吹 紙芝居の絵はお孫さんが描いたんですって?

千葉 姪です。姪が描いたの。

藤本 作るのどれくらいかかるんですか?

千葉 絵描くだけで1ヶ月かかるわよ。

藤本 ですよええ? ちなみに千葉さんはなんでこのお仕事(サポーター)を始めたんですか?



秋田ではなく山形?

千葉さんの紙芝居のおかげで、ようやく与次郎稲荷伝説の概要を知った僕ですが、お話のなかで驚いたことがあります。それは、与次郎稲荷神社が最初に出来たのは秋田県ではなく、与次郎が殺されてしまった山形県東根市によると、与次郎稲荷は秋田よりも山形の方がよっぽど有名で、山形県東根市に現存する与次郎稲荷神社は、飛脚与次郎にあやかり、飛脚の神様として広く知られているらしいのです。マラ

北斗星

日本中を旅する僕は、その土地のことを知るために、地元紙を読むようにしています。それは僕のなかで旅の礼儀という意識すらあって、それゆえに秋田入りすると必ず買うのが、「さきがけ」の愛称で親しまれている『秋田魁新報』でした。なかでも僕が必ず目を通す『北斗星』という連載コラムがあります。僕が思い出したのは、その7月19日付の記事でした。引用させていただきます。



▼土さんは父の手にする初代像を忠実に再現したという。石こう像は当時の試作品だったが、都内のアトリエごと鶴岡市出身のものとなり、市内の温泉宿や市役所藤島庁舎に飾られた時期もある。60年以上にわたり鶴岡の人たちが守ってきたと言える。

▼大館生まれの秋田犬ハチは、亡き飼い主の帰りを渋谷駅前まで待った。その姿をたまたま目にした日本大研究家の斎藤弘吉(故人)が全国紙で紹介したことで一躍有名になり、生きているうちに渋谷駅前の銅像になったのである。

▼その斎藤も鶴岡市の生まれで、東京美術学校(現東京芸大)で油絵を学んだ。安藤

ぱりいいなあ。
千葉 そういふ体験をね、してきたもんだから。すいません。お粗末さまでした。
藤本 いえ、ほんと素晴らしかったです。
一同 ありがとうございます!

ソンの高橋尚子選手をはじめ、様々なアスリートがお参りにくるほど、というからなかなかの知名度。ちなみに千葉さんは「秋田の与次郎なんだから、秋田ももっと上手にやればいいのにね」とおっしゃってましたが(笑)、だれどそこを上手くやれないのが、僕にとっては秋田のいいところでもあります。いい意味でもわるい意味でも、その、のんびり。そこで僕はふと、数日前に読んだ秋田のメジャー新聞『秋田魁新報』の、とある記事を思い出しました。

北斗星(7月19日付秋田魁新報より)

▼ハチ公の石こう像が山形県のJR鶴岡駅構内にお目見えした、との本紙記事(14日付)を見て、なぜ鶴岡なの、と思った読者もいたのではないかと。

▼ハチ公像といえはまず東京の渋谷駅。彫刻家安藤照(てる)が制作し、1934年に建立されたが、戦時中の金属供出で溶かされた。いまある像は、照の息子でやはり彫刻家の土(たけし)さん(89)が、戦災死した父に代わって作った2代目だ。48年に再建された。

言わずもがな、この記事における『ハチ公』と『与次郎』が僕のなかできれいに重なりました。この記事の趣旨は「秋田のみなさん、ハチ公は秋田のものなのに……なんて目くらまら立ってたりしてはだめですよ。そもそも山形の人たちのおかげで、ハチ公は多くの人に愛されるようになったんですからね」ということだと思のですが、秋田の与次郎もまったくおなじだと僕は思いました。山形の人たちがずっと守ってくれていた与次郎を、いまこのタイミングで僕たちがあらためて知ることになりませんでした。



きるように、練習しなあかんね。
千葉 これ、私が辞める時あなたにあげるからね。
藤本 ほらあ。
千葉 だって、図書館あたりに寄付してもみんな眠ってるだけだから。使ってもらえる人にあげた方がいい。
矢吹 頑張ります。
藤本 うん。
 ―ヤブちゃん紙芝居の練習を始める
矢吹 あ、これ難しい!
千葉 抜きながら喋りながらやるっていうのが難しい。
矢吹 しかもこっち(前)見ながらやるんですよ!?

千葉 あのねえ、私、すごい旅行が好きで。あちこち旅行してたらその現地にいるんなガイドがいてね。秋田には誰もいないなあ。で、市の商業観光課の方に、つくらないか、と。そこから始まって、さらに秋田県全体をサポートする『秋田癒しの旅サポーター』を5年前に立ち上げたんです。
藤本 もともとそういうお仕事されてたわけじゃないんです。旅好きの主婦やっただけですか?
千葉 ただただ、物好きの。でも、他の主婦と違うのは10代の頃からボランティアを10年単位でやってきたの。子どもも育成を10年。国際協力、いわゆる「民泊受け入れ家庭」を作ろうっていうのが10年。男女共生を広めようっていうのが10年。
藤本 いつも10年って決めてるんですか?
千葉 自分では区切りをつけたいと思って。だからこの観光案内を10年すると私70超えちゃう。(のんびりチームを見て) こういう若い人が秋田にもいっぱい居てくれたらいいのに。ね、矢吹さん。若い子がいたら私も託していけるのに。
藤本 ヤブちゃん、ちゃんと自分で



千葉 だから頭に入ってないよ。
矢吹 練習します。
千葉 私はテレビもゲームも何にもない時代で生きた人間だから、こういう神社とか広場に紙芝居屋のおじさんが自転車の後ろに乗っけて来ると、おもしろくて行って、たまにそこですごい高度なものを習ったのよ。渡辺華山って知ってる? 子どもは全然知らないような物語をやるの、ひとつづらいは。
藤本 伝記みたいなものですね。
千葉 普段は月光仮面だとか、そういうのをやるんだけど。
藤本 ちょっとと字びを入れてくるんですよ。うまいなあ。
千葉 たまにひとつ、あるのよ。それを必死に覚えて、家に帰ったものねえ。
矢吹 お家でやるんですか?
千葉 家に帰って父親に話すわけよ。そうすると、「お前いいこと知ってるなあ」とか。学校の先生だったから。
藤本 ああ、そうですか。お父さん学校の先生だったんだ。
千葉 父をね、驚かせたくて。東郷平八郎って知ってる? とか。
藤本 へえー。
千葉 そういう話をね、おじさんがしてくれたのよ、昔。
藤本 なるほどなあ。紙芝居ってやっ

今も地元集落に根付いている

『ケダニ地蔵』伝説

地域：湯沢市



かつて雄物川流域では、毎年ケダニ(ツツガムシ)が大発生し、数多くの犠牲者が出ました。とくに弁天村・角間(湯沢市)で被害が大きく、人々はこの悪病を恐れて、ケダニ地蔵を祀って難を逃れようとした。

ある年、出羽の湯殿山(山形県)からつかわされた鉄門海に祈ってもらいました。鉄門海は地蔵尊のお札を三千枚つくり、毎年川に流すように教え、「この札がなくなると、悪病も退散するだろう」と言いました。それから村人たちは毎年旧暦6月24日にお札を川に流し、悪病退散を祈願しました。いつしかこの札を拾った者は悪病を免れるとされ、人々は我先にと川に入り、競ってお札を拾いあうようになりました。

これが「ケダニ地蔵」伝説です。秋田県や山形県ではツツガムシ(恙虫)のことをケダニといい、多くの死者が出る恐ろしい病気でした。いまでは治療法が確立されましたが、かつてはケダニが恐ろしくて、川原の草むらに立ち入ることができないほどでした。

鉄門海は山形の湯殿山麓に住んでいた修験者です。数々の社会事業を行った人で、即身仏となり今でも注連寺に安置されています。もし鉄門海が弁天村に来たとしたら、羽州街道を通ってきた可能性がありますね。

湯沢市角間のケダニ地蔵尊では、今でも7月第4土曜日に集落の人たちが集まり、米や煮物などの供物を捧げ、鉄門海のお札を川に流してケダニ退散を願っています。

日本各地に広がる小町誕生伝説のひとつ

『小野小町』伝説

地域：湯沢市

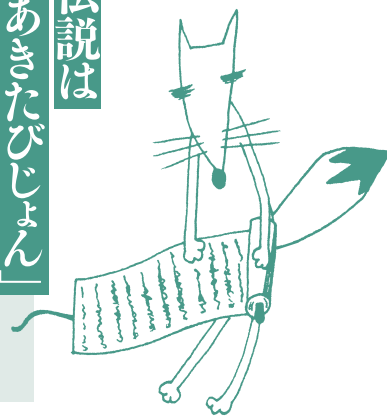


今から千年以上前、出羽国福富荘(今の湯沢市小野)を治める小野良実が、美しい村の娘と結婚し女の子を授かりました。幼い時から和歌や琴が上手で、13歳のとき、父と共に京に行くことになり、都で和歌などの勉強に励みました。

小野小町という名になった姫は才能が花開き、宮中での歌合わせの会に参加するほどでした。また大変な美貌で、多くの男たちから恋文が届けられましたが、京の生活に疲れ、生まれ故郷に戻りました。特に強く慕っていた一人の男が郡代職になり小町を追って来ましたが、事故で亡くなり、小町はその霊を弔うため岩屋にこもり、自分の像を彫るなどして一生を終えました。

小町生誕の地説は日本各地にあります。秋田説が強く支持されていて、秋田県では新幹線や米にも「こまち」の名を付けています。いまさら確実な誕生の地は分かりようがありませんが、全国各地で「我が町こそ小町の生誕地」とアピールしています。

伝説はあきたびじょんだった!!



今号では「与次郎伝説」を取り上げました。伝説は特定の地域を舞台にした物語で、昔話は各地に同じようなお話が伝わる物語という区別があります。そこで秋田県の伝説について「のんびり」と考えてみました。なまはげ、小野小町、辰子姫伝説は全国区と言える有名話で、観光への貢献度はなかなかのもの。このページで紹介しています。八郎太郎伝説は秋田、岩手、青森県にまたがる壮大な物語ですが各県ごとに内容が異なり、比較する楽しみがあります。また、秋田県は鉾山県でしたので、鉾山にまつわる伝説もたくさん残っています。そして秋田県中央を流れる雄物川。この川にまつわる伝説も個性的です。

舞台となる場所やテーマをリストアップしてみますと湖、川、山、巨樹や森、温泉、お酒、雪、そして美人など。なんとこれは秋田県がその魅力をPRするべく「あきたびじょん」というコピーとともに掲げているテーマとはば一緒。ちょっと驚きですね。



秋田で最もスケールの大きい

『八郎の宿』伝説

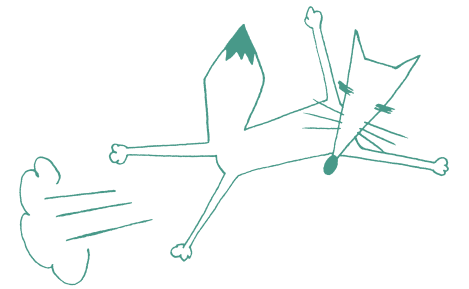
地域：八郎潟周辺、秋田市、大仙市、仙北市



秋田県の伝説のうち、最もスケールが大きく、歴史や民俗的なものと密接な関係がある「三湖伝説」に組み込まれた話です。秋田に住む怪力無双の八郎太郎と、十和田湖に住む修験者・南祖坊が十和田湖の覇権争いをする話に、田沢湖の辰子姫伝説を絡めたものが「三湖伝説」です。それぞれの湖や地域で繰り広げられる物語を、後世、人為的に組み合わせ作成されました。

南祖坊との争いに敗れた八郎太郎は、八郎潟を安住の地とします。その後、田沢湖に住む辰子姫と恋仲になり、毎年冬になると田沢湖に通うようになりました。途中で定宿が10数軒設けられ、旅人の姿をした八郎が立ち寄ります。寝姿を決して見たいという決まりがありましたが、家族がルールを破りふすまを開けてのぞくと旅人は大蛇となっていました。旅人は二度とその宿に泊まらなくなり、家は没落してしまいました。

おおむねこのような話が宿ごとに伝わっています。面白いのはこの宿のうち6、7軒が、今でも残っていることです。追跡してみるとコースは八郎潟・旧昭和町・秋田市・旧協和町・旧神岡町・旧仙北町・旧角館町・旧西木村・田沢湖に点在しています。今でも残る「八郎の宿」。時代や背景を考えるとつじつまの合わない点がありますが、伝説と現実が入り混じった不思議な魅力を持つ物語となっています。



世界遺産平泉にも繋がる後三年合戦

『片目のカジカ』伝説

地域：横手市



後三年の役で、八幡太郎義家が金沢柵(横手市)を攻めた時の話です。義家の家来に鎌倉権五郎景正という武者がいました。景正は戦の最中に弓矢で片目を射抜かれましたが、自分で矢を折って相手を倒し、近くを流れる厨川で目の傷を洗ったところ、多くの血が川に流れ出し、それからこの川に住むカジカは、片目になってしまいました。

このような片目カジカの伝説は秋田県内のほか各地にあり、景正に関わるものもみられます。舞台となった厨川。かつては片目のカジカが捕れたこともあります。河川改修が行われてから見られなくなったと言います。金沢柵跡は史跡公園となり、平泉との関連から訪れる人も多くなっています。



紙芝居を聞いたその足で向かった千秋公園の与次郎稲荷神社は、まさに『与次郎きつね』の殿さま、秋田初代藩主佐竹義宣が祀られている八幡秋田神社の隣にありました。実は僕はこの八幡秋田神社も隣の与次郎稲荷神社も、共に何度も訪れていました。なにせ神社が好きなんです(笑)。ちなみに、本誌『のんびり』を作ることが決まった日の朝にも、僕は一人で八幡秋田神社にやって来てお参りをしました。秋田の人たちとともに、秋田の、いや、日本の未来を作っていくんだと心に誓って『のんびり』を作ろうと思った僕は、

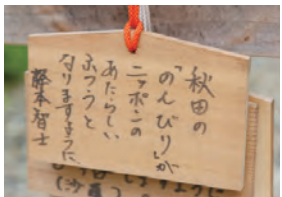
「すみません突然。与次郎稲荷のことを知りたくて……」そう言うと、そのお母さんは、与次郎の話聞かせるよ、うな特別な人はいないけれど、書いた



千秋公園の与次郎稲荷

早速僕たちは、与次郎稲荷神社の今を知るべく取材をスタートさせることに。といってもいきなり山形へ行くのではなく、まずは秋田の与次郎稲荷に

ついて探るため、千秋公園にあるという、秋田のもうひとつの『与次郎稲荷神社』に行ってみることにします。千秋公園は常陸から国替えとなった初代秋田(久保田)藩主、佐竹義宣が築城した久保田城の城跡。山形で与



次郎が殺されてしまったことを知った秋田の殿様が建てたという与次郎稲荷神社です。

した僕の絵馬がきつとまだあるはず。……ごめんなさい。少し話が逸れてしまいました。ただ僕は、その隣にある稲荷神社が、与次郎稲荷だということ

与次郎稲荷の守り手

赤い鳥居を幾つもくぐり、あらためて与次郎さんにお参りをした僕は、そのまま拜殿に上がらせてもらい、どなたかおられないか、声をかけてみます。すると奥から一人のお母さんが出て来てくださいました。伊藤洋子さん(74)。こちらの神社を守っておられる方でした。

伊藤 私ここを守っているものなんです。お祭りとかのときは隣の宮司さんに来ってもらって。ここは八幡神社さんの神様(佐竹の殿様)に仕えたお稲荷さんだから、神主さんを置けない立場

与次郎稲荷のいま。

秋田「よじろういなり？」 第三章



藤本 そうか。使いだからっていうこと。

伊藤 そうなんです。それを守ってる人が昔から、私伊藤ですけど、伊藤家がずっと守ってたものだから。私でもう6代目になってるもんですから。

藤本 今、ここに住んでらっしゃるのはお母さんお一人なんですか？

伊藤 そう。主人が亡くなってね。子どももいますけども、別に家はあるから。私は50年からいるんだもんね。

藤本 ちなみに、僕たちの事務所は楢山の与次郎稲荷の目の前なんです。

伊藤 そう？ 私もあるその前通りましたけど。宮司さんが出て行ってから何年にもなるかなあ。だからしばらくあのまま荒れて。やっぱり誰かがやらなければあなるものね。お隣の八幡さんに行けば色々わかんと思うけども。

藤本 そうですね。聞いてみます。ちなみに山形の東根の……

伊藤 そうそう。こないだ与次郎駅伝『エリアなかいち』のオープンを盛り上げるため第一回が開催された駅伝大会があったでしょ？ あの時にも東根の六田の方からみなさん来られて、寄って行かれました。で、向こうさ私も伺ったことあるけれども、きちつとして。

やってるのよ。

藤本 また伝説が違うんですよね？

伊藤 ちょっとだけね。山形は山形だけど(笑)。これもよかつたら観て。藤本 ありがとうございます。

その後、照れながら記念写真に応じてくれる伊藤さんが一言「夢みたい」と呟いたことを、僕は聞き逃しませんでした。伊藤さんにとっては、きっとまだまだ若者に映る僕たちです。こうやって与次郎のことを熱心に調べていることを、心から嬉しく思ってくれているんだな、と僕のなかの使命の炎がまた少し大きくなりました。

3つの事実

伊藤さんのお話を聞いた後、僕たちは隣の八幡社の社務所に伺い、そこでのおんびり事務所の前にある、楢山の与次郎稲荷神社の話聞いてみます。伊藤さんがおっしゃっていたように、今は守っている人がおらず、神社が荒れてしまっていることに胸を痛めていらっしゃる様子。そして僕たちは「僕たち自身で楢山の与次郎さんを綺麗にしよう」と決めました。

少し遅いお昼ご飯を食べながらの戦



略会議。この後の動きをどうしようかと、あらためて伊藤さんからお借りした資料をみんなで見てみることに。それら資料からさらにわかったことは大きく3つありました。

① 山形県の与次郎稲荷伝説は、山形県東根市六田の飛脚宿の娘「お花」と与次郎の悲恋物語が話の主になっている。

② 花火で有名な、秋田県大仙市大曲にある大川寺というところにも、与次郎稲荷神社が存在する。

③ 千秋公園の与次郎稲荷は、一時期秋田市保戸野金砂町にある、金砂神社に移されたことがあった。

ちなみに、①の山形のお話を要約するとこうです。

与次郎の足の速さを不審に思った飛脚宿の主人、間右衛門は、狐師の谷蔵とともに与次郎を撃つ計画をしますが、それを知った間右衛門の娘、お花は愛する与次郎を守るべく、その計画を阻止しようとしてます。しかし結局、油ね

ずみ(油揚げではなく、ねぎみを油で揚げたもの!)の罠にひっかかり、殺されてしまいます。悲しく思ったお花は、与次郎のお墓を立てました。というお話。

時間はもう14時。さすがに山形行きは明日にして、②、③の秋田県内の2か所を巡ってみることを決めました。なかでも、③の金砂神社は、

僕がまだ、こんな風に秋田に足繁く通うことになるとは想像もしていなかった頃、妻と娘の3人で訪れたことがある神社でした。というのも秋田の

友達が当時近くに住んでいて、家族旅行としてその友達に会いに来たのがきっかけでした。冬だったので雪景色のなかでしたが、その神社の気持ちのよい空気はずっと胸のなかに残っています。

でも話聞いたら、やっぱり向こうも守り手が亡くなって、代替わりになって。ついこの間名刺置いていったんだけども。

藤本 ほんとですか。僕たち向こうにも行こうと思ってる。

伊藤 私、こないだ名刺いただいて。(名刺を持って来て)この方、わざわざ寄ってくれてこれ置いていったんですよ。

藤本 ああ、ほんとですか。(名刺を受け取って)ありがとうございます。

伊藤 そうそう。あと、いろいろ資料あるから。よかつたら持っていって。資料を見せていただく

藤本 え？ いいんですか？ ありがとうございます。

伊藤 あとこれ、テープで撮ってあったんだけど、DVDになおしてくれたのが2本あるけども。それも使っていますよ。ミュージカル。

藤本 ミュージカル!? 与次郎のお話ですか？

伊藤 そう、これは山形の東根の、ミュージカルと次郎。

藤本 秋田の人でなく東根の人がやってるんですね。

伊藤 地元の方が役者になって、向こうがすごくて、うちの与次郎のことを

大曲の大川寺へ

さて、まず最初に向かったのは②、大曲の大川寺にあるという与次郎稲荷。秋田市内から一時間ほど車を走らせやってくる大曲の町は、今号の表紙写真にあるように、全国花火競技大会が有名な町。花火の日には70万人以





る参道と緑の屋根のかわいらしい本殿は、凜とした空気というよりは、思わず顔がほころんでしまいそうな、柔らかなあなたかさに満ちています。そもそもそんなに大きな神社ではないですし、お守りや売るような社務所すらない、町の小さな神社ですが、綺麗に手入れされた境内の植物たちからも、この地域に住む人たちがこの神社をいかに大切にされているかが伝わります。そして僕はこのときはじめて、これまで気づくことのなかった、ある石碑を目にして驚きます。その石碑には『有縁の碑』と大きく刻まれていました。その碑に書かれていたことを要約させていただと、つまり、こういうことでした。

●そもそも金砂神社という名は、金砂町にあるから、金砂神社ではなく、金砂神社があったからこの辺りを金砂町と呼ぶようになった。
●そしてその金砂神社は、元々、佐竹の殿様が秋田にやってくる際に、佐竹氏代々尊崇の厚かった常陸の国、茨城県金砂郷村にある西金砂神社から分祀された。
そしてこの碑は、以来400年に渡り、遠く秋田の地で金砂神社、及び、金砂を冠した町名を守り続けてくれた、秋田の人たちへの感謝の気持ちをおカタチにするべく、茨城県金砂郷村の人々が建てた碑なのでした。僕はこの碑に刻まれた、茨城県の人たちの気持ちに、まるで稲妻が走る思いでした。一時期「与次郎稲荷」が祀られていたという金砂神社。そこに僕は正直、与次郎稲荷伝説に直接的に関わる何かを求めてはいませんでした。しかし既に何度か訪れていたその小さな神社には、また別の大切な何かが待っている気がしていました。その予感はいじやありませんでした。この『有縁の碑』のお陰で僕たちは、明日山形に、感謝の気持ちをお伝えにいくのだというのをハッキリ共有することが出来ました。



上の人が訪れる町も、普段はとてものんびり。目的の大川寺に車を停めるとすぐ目の前に与次郎稲荷がありました。知らずにやって来れば気づかずに帰ってしまいそうなほど小さな与次郎稲荷ですが、一方、大川寺の本堂はとて大きくて立派です。与次郎さんにお参りをしたのち、まっすぐお寺の本堂へ向かった僕は、いらっしやった寺務の方に、与次郎稲荷の話をお聞きしたいとお願いました。「いいですよ」と快くお話をしてくださったのは、大川寺寺務、佐藤敏雄さんでした。

佐藤 まず、なぜここにあるかっていうのは、ほんと不思議っていうか、書き物も何にもないんですよ。殿様の佐竹さんが参勤交代で江戸に参る時、久保田(今の秋田市)から羽州街道を利用してたんです。羽州街道は大曲を通って、横手、湯沢を抜けて、山形、福島へと進む街道なんですが、大曲には殿様が泊まる本陣があったので、大曲を必ず通っていたってということが、まずひとつ。

藤本 なるほど。
佐藤 さらに佐竹さんとこの菩提寺(代々その寺の宗旨に帰依して、ご先祖の位牌を納めてある寺)が、秋田市の



天徳寺さんなんです。ここ大川寺もそこと同じ曹洞宗ですので、しょっちゅう行き来がありました。それで天徳寺さんが元旦に、大川寺は2日に、佐竹さんところにご挨拶に行つたと。

とか長いものが、遮られるからお寺に泊まっていた。それで、たまたま佐竹さんが、この近くの本陣にいらつて見せかけて、実際はお寺にいたつていう話が伝わっている。ただ、書き物が全

あと、殿さんの宿というのは、夜襲かけられたりするので、何にもないところであれば周り囲まれちゃえば終わりにゃないですか。お守つていうのはお墓ありますよね。昔ですと、刀とか槍

然なにもないんですよ。っていうのは、ここは昭和2年に火災で全焼してるんです。
藤本 そうなんです。
佐藤 与次郎っていうのは飛脚ついで

うか、そういう風な妄想をしたもんなんですけど。家来のうちの誰かだつたつていう話もあるみたいです。だから伝説的にはきつねが化けてつていうことだつたけど、やっぱり足の速い足軽的なそういう人が、実際に3日とか4日とかで走つたつていう。けど、まあ、それはまたね、信じがたいですけど(笑)。

寺務の佐藤さんのお話はとてわかりやすいものでした。確かに記録として文書が残っているわけではないけれど、その確かな記録のひとつが与次郎稲荷伝説そのものなのだと思います。伝説というものの奥にある当時の人々のリアルが、ある種の温度を持って伝わってくるようで、僕たちはまたひとつ、与次郎伝説を深く知ることが出来ました。さらに僕たちは秋田市内に戻り、一時期、与次郎稲荷があったという『金砂神社』へと向かうことにします。

有縁の碑

先述したように、家族旅行として秋田を訪れて以来、何度か来たことのある金砂神社。鳥居の先にまっすぐ伸び

銀山住民の
心のよりどころでした

7 金山神社

かねやまじんじや



江戸から明治にかけて、日本最大の銀鉱山だった院内銀山跡にあります。銀山によって栄えた銀山町は、最盛期の戸数は4,500戸、人口15,000人で、藩主のいる久保山より繁栄していたほどです。その村の鎮守として、また銀山の守り神として信仰を集めました。廃鉱になってから50年以上経ち、本殿の屋根が抜け落ちたりしていましたが、氏子の人たちの奮闘で見事修復。湯沢市が取り組んでいるジオパーク構想の歴史的資源として、注目を浴びています。

場所：湯沢市院内銀山町字上本町 40

飛騨の匠の技が
伝わる神社です

5 古四王神社

こしおうじんじや



本殿は飛騨の匠・甚兵衛による名神社建築で、戦前は国宝に指定、昭和29年、文化財保護法の制定で国指定の重要文化財となりました。当時調査した東大や京大の教授たちが、釘を一本も使わない建築を「奇中の奇、珍中の珍なり」「和、唐、天を超越した天下一品」と評価したそうです。

普段、内部を見ることはできませんが、外観は見学できます。向拝とよぶ軒下の繊細・複雑な組木建築だけでも見に行く価値は十分あります。

場所：大仙市大曲字古四王際 30

秋田の『神社』

羽州街道沿線エリア

秋田県南部の羽州街道沿線。
与次郎稲荷のほかにも個性的な神社がいっぱい

実はすごい、秋田の神社

秋田の神社ですが、関西や関東、福島や宮城など東北に比べ、大変古い歴史を持つ神社は多くありません。ひとつには、大和朝廷と戦った蝦夷の影響があると思います。その代り、土着の言い伝え(伝説)や祭り、アニミズム(民間信仰)とつながりを持った神社が多くみられます。秋田県中央を流れる雄物川。流域には「鹿島流し」「鹿島様」という行事が60か所以上残っています。厄除け・村内安全を祈る信仰ですが、必ず村の神社とつながっています。日本一数が多いと言われる小正月行事も同様です。伝説も、湧き水の多くも、神社を抜きにしては成り立たないのが秋田です。

夜通しの掛歌奉納で
沸く神社です

6 金澤八幡宮

かねざわはちまんぐう



12ページの伝説に登場する「金沢の片目カジカ」はこの神社周辺が舞台です。神社は「後三年の役」の拠点だった金沢柵跡(城跡)に建っています。境内には鎌倉権五郎景政功名塚、源義家が戦勝記念に兜を埋めたとされる兜石、兜杉など伝説ゆかりのものがたくさんあります。

ここで有名なのが奉納伝統掛け歌行事です。掛け歌とは二人が対になって、身近なことから世相などを話題にし、即興で掛け合い勝負するもの。境内は見物人で沸き返ります。

場所：横手市金沢字安本館 4 番地

「物部文書」が伝わる
由緒ある神社です

3 唐松神社

からまつじんじや



神宮皇后が創建し、源義家が再建したと社伝にある、県下有数の歴史を持つ神社です。神社のすぐ前が羽州街道ですが、旧街道(旧国道13号)から神社参道に立ち並ぶ見事な杉並木が見えます。樹齢300年以上の老杉で、並木は県天然記念物に指定されています。縁結び、子宝、安産、子安の神様として広く知られていて、全県から女性がお参りにやってきます。また、池に囲まれた大きな石の築山に「天日宮」が祀られていて、水の結界に守られた厳かな世界を感じさせます。

場所：大仙市協和境字下台 84

三重塔を見るだけでも
価値十分

1 日吉八幡神社

ひえはちまんじんじや



秋田の外町総鎮守として商家や町民からの信仰が篤く、「八橋の山王さん」と親しく呼ばれています。秋の例大祭では氏子が多い大町や川反、旭南を神輿が回っています。境内には秋田唯一の三重の塔があるほか、「権現造り」の豪華な本殿、宮殿、拝殿、神楽殿である舞殿、随神門なども揃っていて、秋田における神社様式の代表格です。神社がある山王は羽州街道が通り、菅原神社や宝塔寺、土人形の八橋人形がある、魅力的な雰囲気を持った地区になっています。

場所：秋田市八橋本町 1 丁目 4-1

「ころり地蔵」が
微笑んでいます

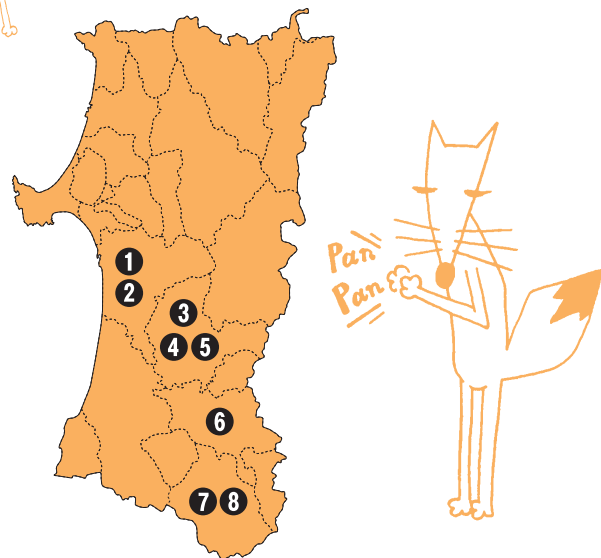
8 愛宕神社

あたごじんじや



秋田藩12社の一つに数えられていました。羽州街道の南端に位置し、藩境の院内閣所に近接していることもあり、参勤交代で羽州街道を通る一行がお参りしたそうです。仏師・円空作の高さ189センチという十一面観音像や大黒天像などが奉納されています。また、神社の入口、羽州街道に面して「ころり地蔵尊」が祀られています。邪気祓いの塩掛地蔵として知られていますが、熱心に拝むと安楽往生を遂げることができると言われ、参拝者がたくさんいます。

場所：湯沢市上院院内字町後 95



かつては浮島に
鎮座していた神社と
伝えられています

4 浮島神社

うきしまじんじや



刈和野の大綱引きは、500年以上の伝統を誇る日本最大級の綱引きで、その行事と切っても切れない縁があるのがこの浮島神社です。大綱引きは観光的側面が強くなり、勝負の結果で米作を占うという、当たり障りのない祭りになっていますが、本来は上町と下町による市場の開設権を懸けた真剣勝負でした。

その勝負が終わった後、膨大な量の綱を奉納する先がこの神社境内となります。斜面に奉納された綱は一年かけて土と同化し、神社と一体となります。

場所：大仙市刈和野上ノ台 221

秋田の春一番の
祭りがおこなわれます

2 福一満星辻神社

ふくいちまんほしつじじんじや



秋田市川反 1 丁目にあり、旭川沿いにあるため水と縁が深い神社です。町なかの人は火伏を願ひ、農村の人たちは水飢饉を避けることを願って参拝した歴史があります。

毎年4月12、13日は「星辻神社だるま祭り」として秋田市民に大いに親しまれています。この日にだるまを買くと火事などの厄除け、事業隆盛、学業成就、良縁来福に霊験あらたかとなっています。当日は大勢の人たちが参道に並び、前年のだるまを納め、新しいだるまを買っていきます。

場所：秋田市大町 1 丁目

山形県の与次郎稲荷。



7月25日朝

秋田県報

山形県東根市にある与次郎稲荷神社に行くべく、早朝に秋田市市場前に集合した『のんびり』取材チーム。あいにくの雨のなか、それぞれに眠い目をこすりながら、いざ出発！ と、その前に僕は、コンビニでさきがけ（秋田魁新報）を買って車に乗り込みました。ここから与次郎稲荷神社のある山形県東根市までは約4時間の道のり。僕はいつものように、買ったばかりのさきがけを開き、早速、大好きなコラム『北斗星』を読みはじめます。そして僕は不覚にも、泣きそうになってしまいました。いきなりですが、ここでまた、その記事を引用させていただきます。

北斗星（7月25日付秋田魁新報より）

あのイチロー選手がヤンkeesのユニホームをまもって、地元セーフコ・フィールドに立っている。移籍が発表された後とはいえ、マリナーズファンは眼前の光景をしばし半信半疑で見詰めていたに違いない。

▼初回、飛球をさばいたイチロー選手に拍手とブーイングが同時に送られた場

面にそんな胸中がうかがえた。だがメジャー12年途中までチームをけん引したシアトルの顔に対し、ファンはねぎらいと感謝の気持ちを忘れていなかった。

▼三回、移籍後初打席に向かうイチロー選手をスタンディングオベーションで迎えたのである。「ありがとう」「さよなら」のプラカードが揺れるスタンドに向け、イチロー選手もヘルメットを脱ぎ深々と頭を下げた。

▼それにしても絵になる男である。背番号が「31」に、打順が8番に変わろうが、自らの役割は着実にこなす。抜群のバットコントロールで初安打を放つと、すかさず二盗。年齢的衰えが指摘される中、新天地で臨むメジャー第2ステージへの期待は逆に高まる。

▼さて甲子園出場を懸けた高校野球秋田大会決勝。こちらも絵になる大一番だった。九回二死からの逆転サヨナラ劇。走者なしから勝利を引き寄せた秋田商の底力にはただただ驚嘆するしかない。

▼惜敗の能代商は統合を控え、現校名で臨む最後の夏だった。戦後初の3連覇の夢はついえたが強さは本物だった。イチロー選手の電撃移籍の衝撃と共に歴史に残る一戦となった。負けても胸を張っていい。（2012年7月25日）

冗談のように思われるかもしれないですが、僕にはイチローの文字がヨジローに見えました（笑）。マリナーズとヤンkeesのどちらが山形でどちらが秋田だという話ではなく、自らの町の誇りだったスターに、ねぎらいと感謝を伝えようとしたシアトルの人々の気持ち。そして、その行動に敬意を表したイチロー選手に、僕はひたすら感動しました。そしてその感動は、昨日、金砂神社『有縁の碑』で感じた気持ちと繋がって、山形へ向かう僕たちの背中をぐっと押ししてくれたような気がしたのです。

山形の与次郎稲荷

山形県に入り、与次郎稲荷神社まで後15分という『道の駅むらやま』に着いた頃には、すっかり雨も止んでいました。そこで秋田編集チームのヤブちゃんが、千秋公園の伊藤さんに教えていただいた名刺をたよりに、山形県の与次郎稲荷の守り手、山口健策さんに電話をかけてみます。なにせ『のんびり』の取材は、いっだって行き当たりばったり。それゆえに、取材依頼もギリギリ。けれどヤブちゃん、なんと山口さんと電話が繋がったようで一

安心。しかし山口さん曰く、一つだけ問題が……。実はちょうど今、本殿が改装中で、ご神体を夜のうちに誰にもわからないところに移動したということです。そんな状態で良ければ、ぜひ会いに来てくださいますこと。ええ、もちろん、伺います！

石鳥居

いよいよやってきた山形県東根市の与次郎稲荷神社。これまで巡った秋田の与次郎稲荷とはあきらかに違う独特の空気に、正直僕たちは緊張気味でした。何より、入り口に立つ石鳥居は、そこにすでに神がいるようなおもむきと、そこへ一人の男性がやって来ました。与次郎稲荷神社を管理している山口健策さんでした。



電話中
 藤本 いいお値段しますか？
 山口 ああ、ちょっと待って。もしもし、与次郎稲荷に今10人ばかり来ています。それで、お料理もあると今教えただけども、グレードはいくらからですか？

山口 いい料理ですよ。俺電話しよっか。俺電話すれば……
 藤本 予約したい。
 山口 あります。それで色んな料理を食べられます。ただね、予約しないと。俺電話しよっか。俺電話しよっか。俺電話しよっか。



山形県の与次郎稲荷を守る山口さんは、とても愛嬌のある素敵なおじさんでした(笑)。僕たちは山口さんの人柄に甘えて、わざわざ宮司さんと呼んでもらい、正式参拝をさせていただくことに。正式参拝とは、本殿もしくは拝殿に上がらせていただく、お祓いを受け、神主さんの祝詞奏上

正式参拝

山形県の与次郎稲荷を守る山口さんは、とても愛嬌のある素敵なおじさんでした(笑)。僕たちは山口さんの人柄に甘えて、わざわざ宮司さんと呼んでもらい、正式参拝をさせていただくことに。正式参拝とは、本殿もしくは拝殿に上がらせていただく、お祓いを受け、神主さんの祝詞奏上



や玉串奉奠などを行って参拝すること。思わずお願いしてみたものの、実はみんな初体験。しかし女性の宮司さんということもあってか、丁寧にその作法を教えていただきながら、なんとか無事に参拝を済ませることが出来ました。しかし……そうなんです。今は神様が

一同 こんにちは！
 矢吹 秋田市から来ました。
 山口 なんだか。
 藤本 立派な神社ですね。
 山口 そうですね。私も先代から受け継いで、今、宮司が7代目です。女の方です。管理してる私は4代目かな。
 矢吹 山口さんが管理をされてるんですか？
 山口 はい。ここを管理してます。
 藤本 今、神さまはいらっしゃらないんですかね？



山口 ご神体は、今この奥にしまっている。それは明かすことはできない。見るとたたりが起るって。俺も見られねえんだ。怖いから見たくねえもん(笑)。だから、みんなマスクして真っ暗なところで運ぶわけ。
 ー全員で参拝をした後、拜殿の中へ
 山口 昭和30年頃には秋田から臨時列車で750人も来た。特に大曲の人がお参りに来て……
 藤本 大川寺が関係あるのかなあ……あの奥の空間にほんとはご神体がいらっしゃるんですね。今は工事だからかえって入れたりしますか？
 山口 うん。今は何もねえんだ。空になってから。
 藤本 では失礼します。
 山口 与次郎は足が速いってゆうことで、スポーツの神で信仰を広めています。高橋尚子、Qちゃんが来たときの写真がここにあります。

山口 もっと安いのあるか？
 藤本 さすが……
 山口 (僕たちに)どれくらいだといひ？ 3150円からだど。
 一同 おお。
 藤本 その半分くらいだと嬉しい(笑)
 山口 昼の食事だから高いって(笑)。うーん、ちょっと待ってね。(僕たちに)あの、懐石料理だから、やっぱり減らすとかわつこ悪いんだって。だけでも、なんぼ減らしても2000円だべ、

藤本 あ、ほんとだ！うん？ これは？ 高橋尚子さんの隣に貼ってるこのお手紙はなんですか？ あ、秋田からの手紙だ。
 山口 この方はねえ、与次郎の手ぬぐいを染めて送ってきてくれました。
 藤本 へえ、すごい。
 山口 ちょっと待って。
 ー手ぬぐいを取りに行ってくる山口さん
 山口 これを送ってよした。
 藤本 へえ、これすごいなあ。いつ送って来られたんですか？
 山口 3、4年なるかな。
 藤本 3、4年前。じゃあ、迎えればね。
 山口 宛名があつたでしょ？ それ、行けば。
 藤本 行ってみよう！ ちなみに今日は宮司さんは……？
 山口 宮司、会いたいですか？
 藤本 会いたいですし、お祓いしてもええないかなあと思って。
 山口 あ、んだらちよと待ってな。

山口 正式参拝でいいね？ じゃあ、フルネーム、団体名。
 藤本 団体名、「のんびり」
 山口 のんびり!? ひらがな？
 藤本 ひらがなで「のんびり」です。
 山口 (宮司さんに) よろしくお願ひ



宮司さんに電話する山口さん
 山口 正式参拝でいいね？ じゃあ、フルネーム、団体名。
 藤本 団体名、「のんびり」
 山口 のんびり!? ひらがな？
 藤本 ひらがなで「のんびり」です。
 山口 (宮司さんに) よろしくお願ひ

佐藤 こんにはは(笑)。
藤本 ほんとに突然、ごめんなさい。実は、山形の与次郎稲荷を管理されている山口さんという方が、秋田の佐藤さんって人が送ってくれたと、手ぬぐいとお手紙をみせてくれたんです。
佐藤 それでわざわざ住所訪ねて来て

藤本 すみませくん。実は僕たち、与次郎稲荷のことをいろいろ調べています。
佐藤 ああ〜。フッフフ(笑)。ちょっと待ってください(笑)。

よじろうファン?
山形県を出た僕たちが向かったのは東根の与次郎稲荷に、オリジナルの手ぬぐいを送られたという、あのお手紙の方のお家でした。お名前は佐藤瑞子さん。住所を頼りに見つけたお家の前に、僕は迷うことなくインターホンをならしました。

くださったんですか?
藤本 ええ(笑)。与次郎のことを大事に祀ってくれている、お礼を伝えるためにも、お参りにいこうと今日行ってきたんです。それで本殿に入らせていただいたら、高橋尚子さんの写真とかと一緒に、佐藤さんのお手紙が貼ってあったんです。
佐藤 そうなんですか(笑)。



いらつしやらない。ということ、拜殿で参拝を済ませた後に宮司さんが案内してくださったのは、まさにご神体を移動した場所でした。

ご神体

どなたかが奉納されたであろう古い与次郎像の横で、箱のようなものに収められ、人目に触れないよう白い布がかけられたご神体が、確かにそこに見えました。僕はもうこれは、与次郎さんが特別に僕たちの近くまで会いに来てくれたと思えませんでした。もちろん白い布に隠されているとはいえ、こんなに間近で与次郎さんのご神体を感じられるなんて、この奇跡的な状況を前に、僕は手を合わせながらひたすら感謝の気持ちを伝えようと必死でした。そのときです。僕は閃きました。いや、おそらく僕の気持ちを言葉にするなら、与次郎さんの願いを引き受けた気がしました。それは、山形のみなさんと秋田のみなさんの気持ちを一つにした物語をつくること。つまりは『のんびり版与次郎稲荷伝説』を僕たち自ら紡ぐことでした。

魅会席

なんだか清々しい気持ちで与次郎稲荷を後にし、向かったのは、山口さんが値段交渉までしてくださった(笑)、文四郎魅。その魅会席は、僕たちの想像を遥かに超えていました。お料理の見た目、出し方、味、そしてそれをいただく空間までも、すべてが素晴らしい。もともと魅が好物な僕は、ず〜と興奮して騒いでました(笑)。これが2000円だなんて、みんな申し訳なくなってしまうって、それぞれにお土産を買って帰ります。山形の人たちのあたたかさのお陰で、お腹も心も満たされた僕たちは、秋田へ戻り、どうしても訪れたかった場所へと車を走らせました。



—と、そこにお子さんが
藤本 突然お邪魔してごめんね〜。
佐藤 双子なんですすよね、男と女の。
藤本 あら! 双子なの?
音央くん はい。
藤本 今何歳?
音央くん 10歳です。
藤本 そうか! 今って夏休みだよ?
音央くん はい。

—玄関に飾られている様々なきつねグッズを見て
佐藤 きつねが好きで集めてるんですよ。好きが高じて、私イラストとか描いてて。
藤本 あ、やっぱり、描かれるんですね。
佐藤 手ぬぐいまだあると思います。ちょっと待っててもらえますか?
藤本 わあ〜。
佐藤 あったあった。これこれ。よかったですらもらってください。
藤本 ええ〜、うれしい〜。



実は、佐藤さんのお家までやってくる間に、車内で話していたことがありました。それは、「のんびり版与次郎稲荷伝説」は、最初に千葉さんに見せていただいたように紙芝居にすべきなんじゃないか? ということでした。しかし僕たち県外チームが秋田で取材を続けられるのは、残すところ明日一日しかありませんでした。ということは、今から物語を考えて、紙芝居にして、明日には発表しなきゃ記事として成立しない(笑)。これはさすがに大変です。しかし、佐藤さんとお子さんに出会って僕は決心しました。作ってみせる! と。そうならば、すぐに戻らなきゃ! です。佐藤さんにお礼を伝え、急いで榎山の、のんびり事務所へと戻ります。すでに時間は夕方6時を過ぎていました。

眠気を覚ます
きりりとした水

7 目覚めの水

めざまのみず



国道13号を湯沢市横堀で国道108号鳴子方面に曲がり、5分くらい走った新川井橋もとにあります。かつては山形県金山町有屋に向かう有屋峠の旧道と、鳴子・仙台方面に向かう鬼首越えの追分だった場所で、古くから旅人ののを潤したことが想像できます。「目覚めの水」とは、冷たく引き締まった水が、ドライバーの眠気を吹き飛ばしてくれることから命名されたもので、付近の方が熱心に掃除をしているため、水回りがとてもきれいです。水場に竜神様が祀られています。

場所：湯沢市秋ノ宮川井

飲むほどに力が
みなぎる水です

5 カ水

ちからみず



湯沢市役所向かいの中央公園入口にあり、六郷湧水群と同じ「名水百選」になっています。中央公園は佐竹南家の屋敷があった所で、明治25年ごろまで佐竹家の御用水として利用されていました。カ水の名前の由来ですが、「この水を飲むと力が出る」と言われ、誰言うともなく「カ水」と呼ぶようになったそうです。水温は一年中12度前後で、水量もほぼ安定しています。口に含んだ印象は柔らかく、その優しい口当たりのファンは多いようです。

場所：湯沢市佐竹町

人気急上昇
湯沢の名水

6 くぞわたの清水

くぞわたのしみず

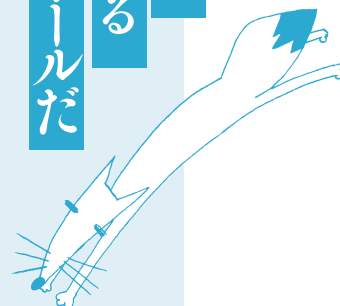


湯沢市中心部から3キロほど南に行った関口地区。その旧国道13号（フルーツライン）から東側の山間に、車で10分ほど上がった所にあります。曲がり角の目印は「香川寺」の看板です。道は途中から砂利道になりますが、右、右と進んでください。水は沢伝いに流れているので沢水にも見えますが、間違いなく湧水です。少し癖がありますが、この水をお茶やコーヒーを入れるのに使ったり、焼酎の割水に利用すると、格段においしくなると評判の名水です。

場所：湯沢市関口字戸沢

湧き水は
人を集める
ブラックホールだ

湧水は地域の心のよりどころ。ほかの土地から人を呼ぶ力も持っています。おいしい水がある所に人々は集い、語り合います。秋田にはそんな湧水が数え切れないほどあり、水汲みをしている光景をよく見かけます。秋田県南部、横手盆地は湧水の宝庫。六郷をはじめ、平鹿、増田、十文字など無数の湧水があり、生活に密着しています。昔に比べ湧水量が減ったとか、清水の周りを整備する人が年取ってしまったとか聞くこともありますが、ほとんどの清水は健在です。与次郎も飲んだかもしれない、街道沿いの清水を堪能してください。



国道 108 号
峠のオアシス

8 笹子名水

じねごめいすい



由利本荘市の鳥海町方面から湯沢市院内地区に抜ける、国道108号松ノ木峠近くに湧く水です。ここはかつて、1年の半分近くが雪で通行止めになる難所でした。1990年代に行われた新ルート工事の際、突然水が湧き出し、工事に携わる人たちののを潤してくれました。そこで感謝をこめて清水周辺を整備、プレゼントしてくれたのが始まりです。水場はドーム状のコンクリートで覆われているため、天候に関係なく水汲みができ、水温10度の水を一年中汲むことができます。

場所：由利本荘市鳥海町赤倉

秋田の『湧水』

羽州街道沿線エリア

羽州街道沿線は湧水の宝庫。秋田市から山形県境まで、街道沿いの名水を紹介します。

町なかに湧き出す
日本を代表する清水

3 六郷湧水群

ろくごうゆうすいぐん



羽州街道は福島県から青森県まで約500キロありますが、沿線にある湧水地のなかで、質・数とも一番と言える湧水群です。環境省「名水百選」、国土庁（現・国土交通省）「水の里百選」などいくつもの名水タイトルを所持しています。町内に湧水は大小合わせて80か所以上ありますが、代表的な清水として御台所清水、藤清水、ニテコ清水、紙漉座清水、久米清水など。町中には湧太郎、湧子ちゃんという2か所の観光施設があり、清水でつくった仁手古サイダー、湧水豆腐などを販売しています。

場所：美郷町六郷

日照りの夏も枯れた
ことがない湧き水

1 三本杉の清水

さんぼんすぎのしみず



刈和野小学校がある高台の下、刈和野バイパスのすぐ近くに湧き出しています。名前の由来となっている「三本杉」は、1991年の台風19号で倒れてしまいましたが、ほかの杉が成長し清水を守るように立っています。

かつて周辺には「七色水」「堤の清水」「大佐沢の泉」という湧水もありましたが枯渇してしまい、この清水だけが残っています。清水には屋根が掛けられ、地域の方々が草刈りなどの整備をしているため、いつもきれいな状態が保たれています。

場所：大仙市刈和野字大佐沢

山と川のある町に
湧く清水

4 羽黒の清水

はぐろのしみず



『青い山脈』『山と川のある町』の作者・石坂洋次郎は、13年間、横手で教員生活を送りました。その時6年間住んだ家の前にある清水です。かつてここにあったサイダー工場の敷地内に湧き出していたもので、場所は横手南小学校のすぐ真横です。町なかを流れる横手川と愛宕山に挟まれたこの羽黒町には、武家屋敷がたくさん残されていて、閑静な雰囲気が漂っています。小学校帰り子どもたちが、清水でのどを潤す光景は、この町にとってもなじんでいます。

場所：横手市羽黒町7

病気や危篤の人に
飲ませた延命の水

2 雄清水雌清水

おしみずめしみず



羽州街道の宿場だった刈和野から約6キロ、日本海側の亀田まで続く亀田街道・大沢郷宿入口にある清水で、毎分500リットルの水が4か所の口から勢よく流れ出しています。湧き出し口は複数ありますが、水源は一緒のことです。

あたりは「宿農村公園」となっていて、駐車場やあずまやが整備されています。宿自治会と清水を守る会の方々毎年2回、湧出口や周辺の清掃作業をしているため、快適な水汲みができるようになっています。

場所：大仙市大沢郷宿

救世主

さあここからはもう怒濤です。正直辛過ぎて、今こうやって原稿書くために思い出すことすらしんどい(笑)。でもその辛さの先に、僕たちは確実に光を見ました。のんびり事務所に戻って来た僕たちが、まず最初に行動したこと。それは、本誌『のんびり』のロゴを書いてくれたり、ユルユルキャラの「のんびりさん」を描いてくれたり、秋田在住イラストレーターのスタタカミツ君に声をかけることでした。いやもうハッキリ言って「職員室来て」級の呼び出し(笑)。僕がこれまでの流れを一気にスタ君に話した後のあの男らしいスタ君の返事を僕は一生忘れないと思います。「やってももらえますか?」「やり……ます」「ほんまに!? うわあーい!」「やるしかないでしょ」そう自分に言い聞かせるスタ君を前に、まだ物語出来てない、なんて僕は恐ろしくて言えませんでした(笑)。

NONのんびり疑惑

とにかくみんな必死でした。僕のかてお話が固まるとスタ君にそれを話し、スタ君がそれを元に絵を描くと、その下書きの鉛筆をカメラマンの



「よじろういなり」 のんびり版

秋田「よじろういなり?」 第四章

広川智基くんが消す(笑)。次にそれをヤブちゃんがパソコンに取り込んで大きく出力。そこに浅田政志くんが色塗りする。と思えば、その横で紙芝居の枠作ってるのんびり秋田チームの田宮さんと澁谷くんという男2人組。さらにヤブちゃんはその合間に、明日お供えするためのいなり寿司の揚げを炊く。そう、まさに修羅場。この作業、本当に終わるんだろうか? と何度も不安に押しつぶされそうになりながらも、全員徹夜の末、クッタクタの状態朝7時半になんとか完成! 「どこののんびりやねん!」という心の叫びを、ぐっと堪えて、ここはひとまず完成を喜びます。しかも! 実は作業はまだ終わっていないのでした。

大掃除

やっぱり数時間だけでも寝よう! と県外組は一旦ホテルへ。そして再び午前11時集合。って、あつと言う間……。しかし、もうやるしかありません。引き続き今度は、目の前の与次郎稲荷神社の掃除をはじめます。それも結構な本気掃除(笑)。のんびり秋田チームデザイナーの澁谷くん草刈り機を持って来てもらって草刈りし、表の囲いを白ペンキで塗り、仕上げに玉

この紙芝居は
秋田県と山形県に伝わる
「よじろう」と言う
きつねのお話です。
むかしむかし、
秋田の千秋公園がまだ
神明山と呼ばれていた頃のお話。



はじまり はじまり



峰々が続く三森山のひとつ、
神明山には沢山のきつねた
ちが住んでいました。まだ
近くには家も少なく豊富な
食べ物に恵まれて、きつね
たちは楽しく、のんびり毎
日を暮らしておりました。

ある時、常陸の国（今の茨城県で
す）から秋田に来たお殿様が、こ
の神明山にお城を作ることになり
ました。それを知ったきつねたち
はある夜、1匹のきつねに願いを
託し、お殿様の枕元に立って、こ
う言いました。
「どうか私たちの住みかを取り上
げないでください。お城の隅でも
いいので、私たちがのんびり暮ら
せる場所を残してください。もし
その望みをかなえてくれるなら、
お殿様のために役に立つことをや
りましょう」突然あらわれたき



つねにおどろいたお殿様は、「わ、
わかった……。それではお城の近
くにお茶畑を作るから、その茶
守番をしながら暮らせよ。し
かし、役に立つことをやるとは、
いったい何をしてくれるのだ」と
聞きかえしました。きつねは「私
たちは走るのが得意なので、江戸
までの手紙を届ける飛脚になりま
しょう」と言うやいなや、
コンッ！一瞬で人間の姿に変身
しました。それを見たお殿様は、
大変喜んでそのきつねに「よじろ
う」と言う名前をつけました。



砂利まで敷いて、まあ見違えるこ
と！ どんどん綺麗になっていく与次
郎稲荷に、僕たち自身、疲れも吹っ飛
ぶ嬉しさでした。そんななか、ギリギ
リまで決めかねたのが、紙芝居の発表
時間。与次郎↓よじろう↓04:06だか
ら、4時6分でしょ!? っていうダ
ジャレにもさすがに今日は乗っかれな
いメンバーたち。いやいや4時は無理
もう昼だよ！ という堅実メンバーの
声におされて、ここは編集長らしく「で
は夕方5時にしよう！」と、我ながら
男らしい決めっぷり。しかしその裏側
で、5時⇨4時6分。すなわち「よじ
ろお」というダジャレが潜んでいたの
は内緒です。

いよいよ

さあ約束の4時6分（笑）。与次郎
稲荷神社に、手作りのいなり寿司と、
昨日いただいた佐藤さんの手ぬぐいを
奉納。紙芝居のセッティングもパッチ
リOK！ 読み手はもちろん、今回の
取材の冒頭で、千葉さんに「紙芝居
継いでね」とお願いされた秋田編集
チームのヤブちゃん。で、お客さんは
……？ はいはい。もちろん呼んでま
す。昨日突然何わせてもらった佐藤瑞
子さんと双子のお子さん音央くん、
音寧ちゃん。さらに、のんびり編集チー
ムも大集合して、さあ、紙芝居のはじ
まり、はじまり。





飛脚に化けた「よじろう」は、江戸（江戸とは、いまの東京のことです）と秋田をほかの飛脚の半分の時間、たったの6日で往復し、お殿様におおいに喜ばれました（ちなみに、その頃、ふつうの飛脚だと14日もかかったそうです）。「よじろう」は、お殿様が喜んでくれるのが嬉しくて何度も何度も江戸と秋田を往復するのでした。そしてそのたびに、山形にある宿でひと休みしていくのが「よじろう」の小さな楽しみでした。



けれど、その宿の主人「間右衛門」は江戸に向かったと思えば、秋田に向かい、秋田に向かったと思えば、江戸に向かう。そんな「よじろう」の足の速さを不思議に思い「これはきつときつねが化けているに違いない」と猟師の「谷蔵」に話をしていました。



一方、そんな「よじろう」に恋をする娘も。宿の主人「間右衛門」の娘「お花」でした。「よじろう」に恋をした「お花」は、いつものように「よじろう」が宿にやってきたある日ついにその思いを「よじろう」に伝えます。「よじろうさま、あなたが風のようにここへやってくるたびに、私の心はしあわせて溢れ、また風のように行ってしまわれるたびに私の心は悲しみていっばいになるのです。どうかお願いです、よじろうさま、ここにずっととどまってもらえませんか？」「よじろう」は、「お花」の気持ちをとても嬉しく思いま

したが「お花」のその気持ちがますますであるがゆえに、ほんとうのことを伝えるほかにありませんでした。「お花さん、じつは私は人間ではなくきつねなのです」「お花」はそれを聞いておどろきましたが、「それでも私は、よじろうさまを愛しています」と言うのでした。



つものように「よじろう」が、秋田から江戸へとお殿様のために大切な手紙を届けたその帰り道。道ばたに大好きな油揚げが落ちていたので、思わず手を伸ばしたところ……

めんなさいー」「たすけてー」と泣き叫びましたが、なかなか病気は治らず、日に日にやせて顔色もわるくなっていきました。



「あーっ！」待ち構えていた「間右衛門」と「谷蔵」のわなに掛かってしまいました。「このきつねめ！うちの娘っこをだまくらかすでないわ！」と、「間右衛門」は「よじろう」に縄を掛け、宿まで連れて行きました。

さらに「このままでは、村人までもがたたりにあうに違いなし」と、そんな噂が村に広まっていきました。それを聞いた山形のお殿様は、立派な石鳥居の「稲荷神社」を建てて「よじろう」を供養したところ、「間右衛門」と「谷蔵」の病気はうそのように治り、元氣を取り戻しました。

「よじろう」は、「どうか殿様に手紙を届けるまでは殺さないでください……」と頼んだのですが、「間右衛門」と「谷蔵」は構わず、「よじろう」を殺してしまいきつね汁にして「うまいうまい」と食べてしまいました。



さて「よじろう」が死んでからずっと悲しみにくれていた、宿の娘「お花」。あるとき、ふと思いつき、「よじろう」のふるさと、秋田へと向かう決心をします。「よじろう」の何倍もの日にちをかけてようやく「お花」が辿り着いたのは、神明山でした。「お花」は、そこに住むきつねたちになんか、よじろう」を好きになっちゃったばかりに父親の手によって、「よじろう」が殺されたこと。そして今は山



秋田の与次郎伝説。そしてそれを大切に守り、繋いでくれた山形県の人たち。それぞれの物語が意味する大切なところを折り込みながら紡いだ、あたらしい『よじろういなり物語』。ここに僕が込めたかったのは、この濃密な3日間得た感謝の気持ちとおおらかさでした。慣れないながらも必死になって紙芝居を続けるヤブちゃん、それに対して「あっ！」とか「あ〜」とか声を出して反応してくれる、佐藤家の音央さんと音寧ちゃんを見て、僕はなんだか感極まりそうになりました。紙芝居が終わってみんなを見渡したら、いつもクールなのんびり秋田チームの田宮さんまで涙溜めて、それぞれにみんな結構なおっさんだけど、なんだか文化祭で燃え尽きた女子高生みたいなそんな気持ちになりました(笑)。

与次郎稲荷伝説を最初にここで聞いたとき、僕は実は二つのことに深い意味を感じていました。それは、いまの秋田の礎を築いた殿さまは、常陸の国、すなわち県外からやってきた人だったということ。そして県内に住んでいた与次郎の使命は、秋田の殿さまの思いを江戸へと届けることだったということ。それはもう完全に本誌『のんびり』そのものだと思っただけです。県外メンバーと県内メンバーが一緒になってつくるこの『のんびり』が、これからもその使命を果たしていけるよう、僕たちは頑張ってみようと思います。そしてきっとその使命を果たしていける。と、与次郎稲荷にお参りする度に、勇気をもらうのです。

藤本智士(『のんびり』編集長)

よじろうのへびり

形で、立派な神社に祀られていることを伝えました。「よじろう」が帰って来ないことを心配していたきつねの仲間たちは、それをきいてみな大声で泣き悲しみました。しかし、きつねたちは、そのことを伝えに来た「お花」のことを悪くは思いませんでした。

きつねたちは、さっそくお殿様に、「よじろう」の死について伝えました。それを聞いたお殿様は「私

が使いに出したばかりに、「よじろう」は、そんな目にあつたか。なんと可哀想に……」と悲しみ、お城の一番良い場所に『稲荷神社』を建てて、毎日お参りしました。今、千秋公園にある赤い鳥居がたくさん並ぶ神社が、その『与次郎稲荷神社』です。また、お城にはいつも殿様ののぼりを持つ旗組と言う役人が居ましたが、その人たちの住んでいた「榎山登町」にも同じ『与次郎稲荷



の人びとに、とても尊敬されていたのです。「お花」は、そうやって神社を訪れる人々を歓迎しては、帰っていくその人たちの後ろ姿をよ〜く眺めるようにしていました。なぜかという……

おしまい。



木村伊兵衛「秋田おばこ」視線の先にあるもの

のんびりまっすぐ あたらしい あきたびじん

取材・文 笹尾千草 写真 浅田政志

Text Chigusa Sasoi / Photo Masashi Asada

菅笠をかぶり、かすりの野良着に身をつつんだ美しい女性の写真。「これが本当の秋田美人!」「このモデルは誰?」秋田県の新しいポスターに採用されるや否や話題になっています。

これは、1950年代、写真家の木村伊兵衛が秋田の農村を訪れた際、地元的女性をモデルにして撮影した「秋田おばこ」という作品。美人の宝庫秋田といえども稀に見る美しき。撮影から50年以上の時を経てもなお、こんなにも魅かれるのはなぜ? そう考えてあらためて見つめると、ずっと未来を見据えるかのような強い視線。木村伊兵衛はその強さに本質的な美しさを見つけてシャッターをきったのでは……。

「農作業は苦しくて惨めなもの」というイメージがスタンダードだった半世紀前、ここ秋田の農村で悠々と生きる庶民の姿に光をあてた写真家の、一枚の写真の力につき動かされた編集部。

「この土地で生きる、『あたらしいあきたびじん』に出会いたい!」と次々と候補が挙がる中、ひとりの女性が浮かびました。金属工芸作家の坂本喜子さんです。なんと、彼女の住まいは、木村伊兵衛があつた「秋田おばこ」を撮影した大仙市の西根地区。さらに「のんびり」のカメラマンである浅田政志は、第34回木村伊兵衛写真賞を受賞した写



真家。なんだか運命的に繋がった「秋田美人」と「木村伊兵衛」と「のんびり」。私たちは、現代の秋田美人について考えるべく、坂本さんのもとへ向かいました。

木村伊兵衛と「秋田おばこ」

木村が秋田で撮影した代表作のひとつ。モデルは大仙市角間川の柴田（旧姓）洋子さんという高校を出たばかりの女性でした。柴田さんは農家の娘さんではありませんが、前年に開催された「第1回全県おばこコンクール」に参加し、そのときの写真を木村の目に触れ、この写真撮影となりました。撮影から60年近くたっていますが、写真の魅力は色あせていません。「秋田の一枚」を人気投票で選ぶと、この写真が一番になりそうです。

木村伊兵衛とは

1901年（明治34年）東京生まれ、74年（昭和49年）没。日本写真家協会初代会長、人物や街角風景の写真に手腕を発揮しました。51年（昭和26年）開催された秋田県総合芸術展覧会の審査員として初めて秋田を訪問。以後、20年間で21回も訪れ、県内のアマチュアカメラマンに多大な影響を与えました。日本酒と女性をこよなく愛し、優しい視線で秋田の農村風景と農民の暮らしを記録しました。写真家の登竜門となる「木村伊兵衛写真賞」は彼を記念して創設されたものです。





坂本さんは現在32歳。3年前に大工である1つ年下の巧さんと結婚し、全国花火競技大会で有名な秋田県大仙市大曲に、一軒家と工房を構えました。2ヶ月前に生まれたばかりの息子、喜勢ちゃんを抱いてのインタビュ。そこには、いいことも、そうでないことも受け入れ、あたりまえの豊かさ、を暮らしの真ん中においた、のんびり、まっすぐな秋田の暮らしがありました。

「この子が生まれてこれまでとはがらりと違う生活。とりあえず自分のことは何にもできないんだなって。でもご飯をつくれてるだけいいのかなって思ってます」

大きな窓の外には青々と色づいた一面の田んぼ。金色の夕日が差し込むキッチン。そこにベビーベッドを置いて、喜勢ちゃんのおなかをどんとんしながらお話ははじまりました。

「子どもが欲しいと思っていながら、できてみたら、ここからどうなるんだろう？ って、そういう気持ちはあったかも。自分の工房ができて1、2ヶ月っていうところだったから……。『工房できたのに』って（笑）。でも妊娠中も教室ひらいたり、あと、展示会にも参加したし、がんばりました。ツワリをおして（笑）」



「工房の話になると、小さな身体をびんっとさせて目が輝きます。そんな無邪気な彼女は、こうみえて実力派。受賞歴もあるし、都市部のクラフト展に秋田代表として参加していたりもします。もともと鍛金といつて、1枚の板を叩き上げて形作る技法が専門。器や、最近では照明の傘などもつくりつつ、もっと求めやすくして身近なものもつくりたい、今はアクセサリも積極的につくっているのだそうです。」

「学生時代は鋳金といつて、砂で型を

つくって溶かした金属を流し込む技法をやってきました。卒業してからかな鍛金と彫金は。たまたま同級生のお母さんが金工の伝統工芸家で、萩野紀子さんって言うんですが、埼玉の、その師匠のところへ弟子入りしました。2年間みっちり、ほぼマンツーマンで学んで。20、21歳の頃なんて誰だっけ遊びたい盛りじゃないですか。なのに毎日工房行つて。ものすごく人里はなれた山の工房でつくっていました。周りに友達もいなくて、俗世間から離れておばあちゃんくらいの年の方が1人いて、おばあちゃん、お母さん、孫みたいな女3人で。お昼とか、周りの山眺めながらお弁当食べて、鳶とか飛んでね、これ以上ないくらいいのか。なんか私、世の中の感覚からズレてくんじゃないかな……。なんて。楽しかったけど、淋しかった」

そんな修行生活もつかの間。実家のご両親からの通達が……。

「東京に出た大学に……がなくて、親から『大学にいったつもりで、県外にだしてもらったんです。短大を卒業してからだから、』残り2



年でもものにしなさい」って言われて。ものにならないのなら帰ってきなさいって。でも実際は2年くらいの技術じゃ、何ができるわけでもなく、どこに就職できるでもない。連れ戻されるようにして帰ってきました。強制的に。その時はもつと何とかしたかったなって落ち込んだけど、反面、工房で働いてご飯食べていくのは何か違うなあって思ってた……。現実的じゃないとかか……。どうしていいか自分でも分からなかったんです」

秋田に連れ戻されて意気消沈していた坂本さん。でも「まずは働かなきゃ！」

というところで、たまたま募集していた図書館での臨時職員の仕事を始めます。

「秋田でも鍛金をやろう！ って意気込んで帰っては来たけれど、実家だし、あるのは自分の部屋だけで、やりたいけどやれる環境が無く……。2年くらい制作は殆どできなかったな。図書館はものすごく忙しいところで、一生懸命働いて一日が終わると、もうダウソソって感じ。設備的にも鍛金ではできなかったけど、疲れ果てて体力的にも厳しかった。でも図書館で働くこと自体はすごく面白くて、私の世界を広げてくれたって思います。それまでは、ただがむしゃらにつくっていたけれど、社会に出たことで、具体的に「どんな人に届けたいのか」っていうことが分かるようになりましたね。私が配属されたのは移動図書館で、バスに乗って、いろんな子どもとかお年寄りとか、遠くで図書館に来られない人たちの所へ本を届けて貸し出すのが仕事でした。なんか、本を中心として色んな交流があったのがとにかく面白かった。

あと、働いてお金稼いで、生活のベースができたことで、金工を続けてく軸ができた時だった。修行している時から、工芸だけのご飯食べてくのは、私の場合、現実的じゃないなって思っていたから、そうじゃなくつくっていい

るベースができて、精神的にすごく安定しました。以前は、私が工芸やってるって、誰が知ってるわけでもなかったし、何者でもないフワフワした感じがとにかく辛かったから」

そんななか、あらためて司書の資格をとり、母校の美術短大の図書館に就職が決まった坂本さん。教授に紹介された秋田市内の柰目銅の工房に通いだし、念願の自分の工房も完成します。

「図書館の仕事が終わって帰ってきて、夕飯食べたら工房行つて制作して……。ということ、何とかできる範囲でやってきました。ほそぼそ……。でも、千貝工芸さんの工房へは毎週通つてたんです。千貝さんは60歳で自分の会社



※ 柰目銅

柰目銅とは日本独特の鍛金細工の一種で、発祥は今から約360年前の慶安年間（1648〜1651）。秋田藩に仕えた刀装具職人の正阿弥兵衛が考案者とされています。秋田の現代作家としては、秋田では千貝弘氏、林美光氏が知られています。

を退いて、空目銅という秋田の伝統的な技法が途絶えてしまわないようにって、貴重な技術を若い人に伝えていくんです、おしげもなく。なんかゆるい感じなんだけど、懐深い人。師匠が2人いるというのはよかったですと思う。1人は女性、1人は男性っていうのもよかったです。萩野さんは厳しい目で、工芸の美」というのを教えてくれたし、千貝さんはステンレスの工業製品をつくる会社の社長さんだった人で、それではかなあ、次々と色々な技術を指導してくれました。師匠が1人だと、それが100%になっちゃうけど、私は2人



の師匠からいいとこ取り(笑)」

合間にお手製のミルクプリンをふるまってくれた坂本さん。キッチンほどよく整っていて、いかにも美味しそうな食卓の風景が思い浮かびます。少し開いた窓の外には工房が。料理と鍛金の場がごくごく自然に向かいあっていました。

「第一の師匠の萩野さんには、妊娠したって連絡したら、もう、本当に喜んでくれて、師匠の息子さんも数ヶ月違いで子どもが生まれてたから「息子も喜ぶちゃんも親になるって不思議ね」って。萩野さんもお腹に子どもが居なが



ら工房にたたくに行ったらいい。私、ちゃんと「生活」もしながらものをつくっていきけるようになったらいい。私、思ってたんです。非日常的な生活で制作するんじゃない、家事の延長線上にもどろりがあるような。師匠の萩野さんも、生活の中に工房があった。子育てもそうだけど、工房の周りに畑があつて、制作が行き詰ると「ちょっと行ってくるね」って畑に行つて、オクラを採ってきて茹でて食べたり。わたしの場合金工は、「表現」というより「作業」。料理や、編み物や、縫い物と同じような感じで、それがたまたま金工だったからちょっと難しいな感じが(笑)」

埼玉から秋田市へ引っ越し、生活のベースが整ってきた頃、結婚して旦那さんの実家がある大曲へ、またもや拠

点が動くことに。日が暮れかけた頃、母屋の隣にある工房に場所を移して、道具や作品、つくりかけのものを見せて頂きながら、さらにお話は続きます。「うまくまわりはじめていたところだったし、それをおいて、また新しい環境へ移動するのはやっぱり不安だった。田舎でのんびり暮らしたいって思いもあつたけど、なんだかんだいって私、街中育ちだし、いざ田舎に住むとなつたら尻込みしたりもして(笑)。ああ……こんな淋しいところに住めるのかなあ……なんて。

けど、実際に来てみて、1年後にはお義父さんに工房も建ててもらえて、『やった！』っていうか、もう安心して。子どもができてすぐ隣が工房だし。ここは大工の休憩所だったんだけど、そこを改装して。理解のある家に嫁いだなーと。大工さんってやっぱり普段自分でものつくってるから、分かってくれる。サラリーマンの家に嫁いでいたら、状況は違ったなって」

ひとつずつ、その時、その時を受け入れて整えてきた環境。埼玉から連れ戻したご両親の厳しさも、受け入れたからこそある今。そこには、妥協せず本気で想いあう家族の姿がありました。「秋田に引き戻されたときよりは、つくっている私」を認識してくれるよう

になってきたかな。とくに何か感想言うとか、褒めるってことは絶対ないんだけど。こういう環境になって、いつものまにかね。でもきつと、働いて、自分で社会に出たっていう前提があつたから理解してくれたのかな。そのままただものづくり続けていただけでは、そうはならなかったと思う。この工房の内覧会には来たけど、普段はこつちまでは踏み込んでこない。今は孫が生まれて嬉しい！って、ただただそんな感じ(笑)。結婚の時も大変だったよ、よく突破できた、ほんと。結婚したいと言ったら、『仲人を連れてこなきゃだめだ。ちゃんとした結納しなければだめだ』とか、私たちにとっては無理難題っていうの？ そういうの言われて、もう結婚できないかも！って思った



こともあつた。どちらかというと、うちの父親は大工なんて思ってたの

でもなく、父親的にはサラリーマンとか公務員とか、安定している人と結婚してほしいって。つきあっている時は絶対に会ってくれなかったし、認めないっていうのではなく、親として……娘の将来を心配していたんだね、きつと。それでも、結納にはじまり、ちゃんとした段階を踏んで結婚できたから、お父さんも今では「たくちゃん。たくちゃん」(旦那さんの呼び名)って認めてくれて、成田家とも、坂本家ともいい関係を築ける。やっぱりこれは巧くんの温厚な人柄だからかな。けど巧くと2人でがんばってそうしたっていうより、だってお互い好きだから、せつかく好きだから、みんなに祝福されて結婚したいって思った。だから難題でもクリアして、だからこそ、こうして家族も認めてくれて、喜んでくれて。お父さんがこの子を見てしみじみ、「望まれて生まれてきて、本当にこの子は幸せな子だな」って言ってたんだって。私には直接言わないけれど。だから、本当によかつたなって」

すっかり日も暮れた工房で、だっこしている喜勢ちゃんの顔をのぞきこむ坂本さん。感情がこみ上げる。察した



のか、ふいに泣き出した喜勢ちゃん。喜勢「ふいー びゃー びゃー びゃー」

「……あーん、泣いたー！ 幸せな子なんだぞー。もう、幸せな子なんだからね、あなたは。もおー！」

涙まじりの、でも力強い声で、腕の中の息子を揺らしながら語りかける坂本さん。それに応えるようにいつそう大きな泣き声で泣く喜勢ちゃん。

「妊娠したかと思って思って、病院に検査に向かっていた時ね、虹が2本かかっていたの。あとね、逆子がなおつて、外を散歩している時、四つ葉のクローバーをね、4つも見つけたの！ トコトコ、ピって！ この子産んでからもさらに2つ見つけたんだよ。なんだかこの子はいいものを運んできたんだなっと思ったね（笑）。この子は私がいないと死んでしまう存在。私がおっぱいあげないと死んでしまう。そんな存在がいるってすごいなって。結婚した相手とも違う、さらなる重要な存在の人って思う」

数年前までは想像もつかなかった今の暮らし。家族がふえて、また新しい日々が始まる。この瞬間にあたって、最後に坂本さんが思い描く未来について聞いてみました。

「すぐにでも東京に戻ってやる！ っ

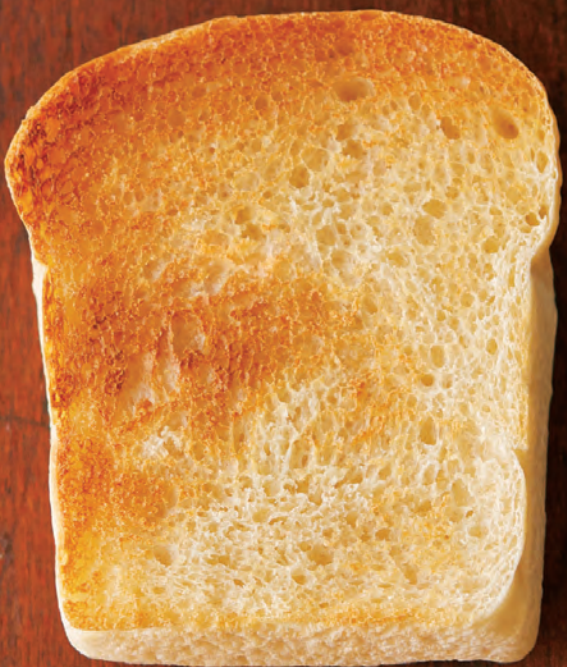
て思っていたのに、まさか、秋田の、しかもさらに田舎の大曲に暮らすなんて。でも来てみればすごくいいところだし、ものつくるには申し分もないところ。なにより、窓からの景色が豊か。天気とか季節によって変わっていく田んぼを見るのがすごく新鮮。元氣もらってます。今までの人生で最も理想的な住まいと工房。この子が生まれたことについては……ものつくるのも一生のことだし、子育ても一生のこと。なんか、二本立てになったのかなって思えています。この子をおろそかにはできないし、つくれないことをこの子のせいにはできないから。何とか自分でうまくやりくりしていきたいっつ、金工も続けたい。

いやあ、『すべてよし』だね、こりゃ（笑）。本当に有り難い。東京から連れ

戻された時も、結婚する時も、大曲に引っ越してきた時も、問題があってもだいたい最後には『すべてよし』。私の性格的にもそうなのかも。最初はあーどうしようって思うけど、でも結局身を投じてみると、意外とそうでもないかも！ っ。なんとかなるんだよね。今はやっど落ち着いた場所にとどろついた。ここで死ぬんだなあという感じ。ここに暮らしたい。子育てで、金工で。これまでは、引っ

越してきてからも秋田市の工房にでかけたり、まだまだフワフワしていたけれど、「番長く暮らすことになるこの場所に、これからしっかりと根付いて、暮らし、つくっていききたい。そう思っています」

秋田の ブレない ブレッド



「米どころの秋田でもおいしいパン屋さんってある？」のんびり編集会議でパン好き県外メンバーから挙がった質問に、何をおっしゃる！「いっぱいあるよ」と次々にオススメパン屋を語る県内メンバー。しかしそれらのパン屋さん、それぞれのお店の特徴を聞けば聞く程、どうも一癖も二癖もありそう。

そう言えば、私がよく行くいくつかのパン屋さんも、どういわけか芯の強い人や、考えがはっきりした人が多い。

やはり米どころ秋田であえてパン屋を営む人たちは、何かしらの「ブレない」精神があるのかも……。

そう思った私は、そんな秋田の「ブレないブレッド」を探しにパン屋さんを訪ねてみることにしました。



ロシア人もうなった 秋田生まれのロシアパン

ベーカリー サンドリヨン
田多井順子さん

ロシアの気候風土と似ているという秋田。いつか地元で採れたライ麦でパンを作りたいというのが、田多井さんの夢です。そして、たつての願いは、後継者がほしいということ。「パン作りは簡単なものではないありません。体力も時間もかかるので耐強さが必要。もしも、それでも本気でやりたいという方がいれば、是非いらしてください！」

「秋田に帰ってきて良かったと思うのは、やはり自然があるということですね。厳しい四季もあるけれど、自然は人間の原点。精神的にもとても良いと気がつきました」

「お客様から『ロシアのものよりおいしい』と言われることは喜びではありますが、いつまでたってもこれでいいということはありません。いかに本場のものに近づけるか、それに向かっていることが楽しいですね」



秋田県北秋田市元町 8-19
☎ 0186-84-8072
<http://www.sandoriyon.com/>
● 営業時間 9:00 ~ 18:00
● 定休日 毎週火曜日・祝祭日
● ほほ予約販売の工房主体のお店です。店頭販売分は多くありません。

じゃがいも、にんじん、さつまいも……レトロな棚に並ぶ、地元食材を使った野菜ぱん。中でも大人気のかぼちゃぱんは、84歳になる克仁さんのおばあちゃんの手で採れたものを使用しています。「おばあちゃんの野菜があまりにもおいしくて。嫁ぐまで野菜はスーパーで買うもので、嫌だったけど、旬のものを食べる満足感を知ったんです」と凡子さん。結婚を機に二人で一緒にできる仕事をと6年前から始めたパン屋。自分たちに

しかできないものを目指し、そばにある食材で作りました。そのパンで大きくなった、長男の仁大君の七夕の願い事は「凡のぱんやさんになりたい」。最近は一一緒に野菜の収穫をしています。凡という字には「みんな」という意味がある。おばあちゃん、子どもたち、みんなの手で作られたパンが、街のみんなを喜ばせる。小さなパンが幸せのリレーをもたらしているようです。



秋田県由利本荘市小人町 20-2
グリーンハイツ 5号
☎ 0184-22-8850
<http://panyabon.blog111.fc2.com>
● 営業時間 10:00 ~ 18:00 ● 定休日 日曜日

かぼちゃぱんは 幸せのバトン

天然酵母の店 凡
佐々木克仁さん 凡子さん



2000個が完売！ 人気のメロンパン

お菓子のフレンドール
店長 佐藤則子さん



秋田県横手市旭川 1-5-39
☎ 0182-32-8725
<http://www.friendoll.co.jp/>
● 営業時間 9:00 ~ 18:00
● 定休日 1月1日のみ

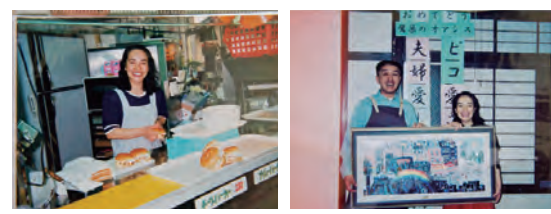
「ここは秋田？ と疑ってしまうほどの活気。所狭しと並んだパンやお菓子に誘い込まれるようにお客さんがやってきます。」
フレンドールといえばメロンパン。ピーク時は2000個があつという間に完売してしまうという、不動の人気商品です。やわらかい生地に上質な生クリームが挟まったスタイルは昔から変わらない、職人の手作りによるもの。
「作る数に限界があるので、スタッフですらたまにしか食べられないんですよ」と話す佐藤さん、じつは娘さんと親子二代に渡る、生粋のフレンドールファン。共にこの店のパンで育つたと言ってもいいほどです。
「ここで働くことが子どもの頃からの夢でした。この店が大好きなんです」と、迷いなく話す佐藤さん。この店の活気を作っているのは、メロンパンのような看板商品と、何より、こんなふうに誇らしげに働く人たちの姿なのかもしれません。



サンドイッチの先に笑顔が見えるように

Sandwich & Brunch はら
原 定利^{さだとし}さん 恵子^{けいこ}さん

秋田県北秋田市鷹巣字本屋敷 106-8
☎ 0186-63-1399 ● 営業時間 19:00 まで ● 定休日 元旦のみ



ふわっふわ。口の中でひとつ一つの具が踊り出すような……。そんなサンドイッチが、鷹巣^{たかす}の地元民の「ソウルフード」としてあると聞き、たり着いた工房。ご主人の定利さんから手渡されたのは、溢れ出しそうなくらい、ぎっしりと具が詰まったサンドイッチでした。「サンドイッチは具を食べているようなもの。1個食べれば満足できるものにしたかった」

一番人気という卵サンドは、秋田県民の舌に合せてほんのり甘め。ボイルした卵を1個1個裏ごしした後、急冷し、手作りマヨネーズと和える。細やかなこだわりが、夢のような食感を生み出しています。

作り続けて今年で35年。11年前までは駅前のショッピングセンターの軽食店でサンドイッチを提供してきました。

「お店をやっているところは楽しかったね。お客様と励ましたり、励まされたりして。あの頃からの人との繋がりが一番の宝物」と恵子さん。

現在は製造のみですが、衛生管理の徹底ぶりには目を見張るものがあります。「サンドイッチの先に笑顔が見えるように。そのためには、いい加減なことをしない。それが信頼となり、財産となる」

そのまっすぐな精神までもがパンに挟まって、鷹巣の人たちの口へと伝わり、長く愛され続けているのだと感じました。

「1個でも買ってくれる人がいるならやっていきたい」。サンドイッチを前に、お二人は笑顔で溢れていました。



かたーいパンとのワクワクな出会い

自家製酵母パン WAKU 加賀谷美紀^{かがや みき}さん

「東京にいた頃、初めて自家製酵母のパンに出会ったんです。その時の衝撃があまりにもすくくって。かたーいパン。秋田にはそんなパンはなかった。自分でも作り始めるもの、なかなか上手くいかない。いろんなパン屋さんに押し掛け、ヒントをもらい、独学で研究しました。そして完成したのが「ブレイン」。小麦の味がよくわかる、毎日食べても飽きない味。これしかできないけれど、自分の中の大事な味が生まれました。」

そこからパン屋を続けて15年。店名のWAKUは、今は仙台にいる息子さんの名前の「文字」から。「15年やってこられたことが奇跡！ 続けられたのは、最初の衝撃と、始めたからには潰さないという気持ちから。やめたいと思ったことは一度もないけれど、息子がいたからやってこられたんだろね」

お店には、かたーいパンとともに、息子さんの版画が大切に飾られています。

(秋田店) 秋田県秋田市旭川新藤田西町 7-6
☎ 018-833-7245 ● 営業時間 10:00 ~ 18:00 ● 火・木曜日営業
(男鹿店) 秋田県男鹿市野石字北湯谷地 109-8
☎ 0185-47-2383 ● 営業時間 10:00 ~ 17:00 ● 土曜日営業



姉妹がつくる、実直パン

自然酵母のパン屋 Pano パーノ 佐藤清子^{さとう しみず}さん 葉子^{かき}さん

「これが天然酵母と良質な小麦ならではの香りなんです。うっとり、香ばしい香りとともに葉子さんが運んできた、焼きたての「ハイジパン」。食事パンとして人気の定番商品です。国産小麦の粒を石臼で挽き、丁寧にふるいにかけ全粒粉にする。パーノではこの作業を絶対に欠かしません。さらに、発酵の際は糖分や油分を加えずに、極力、自然のまま、そのものを力を生かします。」

それを手助けするのが清子さんの役目。大変手間はかかりますが、その実直な姿勢が、味や香りに反映されています。

お客さんの「おいしい」の言葉を支えに続けてきた17年間。オープン当時から変わらない、はきものを脱いで入る店内は、話をしたくて来るお客さんも多いといいます。丁寧に作られたパンはもちろん、この店の存在自体がお客さんにとっても拠り所となり、日々、お腹と心を満たしているようです。

秋田県湯沢市山田字松ノ木 74-54
☎ 0183-72-2468
● 営業時間 11:00 ころ~17:00 ころ ● 定休日 月曜日・木曜日



変わっていく街・変わらないパン

おっぺる青木堂 青木 豊^{あおき 豊}さん

秋田市内の商店街にある、象さんマークが目印の「街のパン屋さん」

あんぱん、カレーパン、チョココロネ……ほっとするようなパンが次々と焼き上がり、ひっきりなしにご近所さんたちがやってきます。

7種類あるミニクワッサンは、市内のホテルや幼稚園にも卸しているという、15年前からの人気商品。店主ご自身もお気に入りです。

菓子店を経て1977年からパン製造を始めたこの店は、豊さんが2代目。

「いまはとも敵しい時代。大手に対抗するには大手と同じことをしても通用しない。だから、先代からやってきたことを大事に、根強い人気のもを残しています」

そんな中、お小遣いを握った子どもたちがトレイを持ってどれにしようか迷う姿が。長年この街の変化を見続けてきたお店ですが、沢山のパンを前にウキウキするお客さんの表情は、いつの時代も変わらないようです。

秋田県秋田市保戸野通町 3-22
☎ 018-823-1622 ● 営業時間 8:30 ~ 18:30 ● 定休日 お正月休みのみ



それでも、今回訪れたすべてのお店から聞こえてきたのは、人や土地への感謝でした。厳しい環境は何のその、それを受け入れて、ただお客さんの「おいしい」を聞くために、淡々とパンを作り続ける。そんな秋田のパン屋さんがつくるパンは、やっぱり「ブレないブレッド」でした。

秋田でパン屋をやっているのは、とても大変です。

酵母を作る。粉を捏ねる。発酵させる。焼き上げる。これを毎日続けるのがパン作りです。パンはすぐには出来上がりません。夏は暑く、冬は寒いという秋田の気候に合わせた発酵も難しく、雪で閉ざされる時期は、客足も遠のいてしまう……。それに、米どころ秋田では、パンは「おやつ」のイメージがあり、食事としてはなかなか受け入れてもらえない。



先代の味、そのままに

パン工房 かつた
かつたむつき
勝田陸樹さん

秋田県横手市寿町 7-20
☎ 0182-32-2860
● 営業時間 7:00 ~ 19:00
● 定休日 日曜日



昭和7年から駅前前で営業する、横手ではおなじみの店。3代目の陸樹さん、もともと後継ぎ気はなかったと言います。映画監督に憧れていたものの、東京のパン屋に就職。パンを作ることは意外に面白かった。つまらなかつたらすぐに辞めるつもりだったのに、28歳で帰秋。33歳の時に2代目であるお父さんが亡くなり、もはや逃げられない(笑)と、後継ぎことを決めました。

ある時、先代からの人気商品「コーヒーマーブル」のクリームをリニューアルしようと常連さんに試食してもらったところ、反応は賛否両論。

「こっちはほうがおいしいだろうとか、勝手な思い込みで変えてはいけない。昔のまま、手を加えないほうがお客様も喜ぶとわかった」

先代が作り上げてきたものを尊重し、今、それを確かに受け継いでいられることが、陸樹さんの誇りとなっているようです。

秋田県秋田市手形字扇田 42-1
☎ 018-837-5313
<http://ameblo.jp/manmaru-717/>
● 受け渡し時間 11:30 ~ 17:00
注文を受けてからの販売となっています。毎週木・金・土曜日の受け渡しで、ご注文は、受け渡し日の3日前まで。



気合いたっぷり おにぎりみたいなベーグル

まんまる
かわたゆみか
河田弓加さん

「パンより米や麺が好き」と話す河田さんがベーグルを作り始めたのは、娘の秀世ちゃんが生まれてから。「それまで気にせず食べていた物に、何が入っているのか気になるようになって」せめて主食は自分の目の届くものにと、天然酵母でパンを作り始め、一番長く食べていけそうだったベーグルをさらに探求。「大好きなおにぎりに、一個で済ませられるものがいい」と、生地に具材を混ぜ込みました。定番商品にも、いぶ

りがっこ、えごま、味噌など、まるでご飯のお供のような具が入っています。

そんな河田さんのベーグルは、モチモチ感が迫ってくるような強烈インパクト。「忘れられるような味にはしたくない。『河田いきまっせー!』と気合いを込めています」

はつきりと意志を持った、勢いのある口調の河田さん。彼女のベーグルはまさにその分身のようです。





航空

東京(羽田)⇄秋田 ANA/JAL 65分(ANA)、70分(JAL)

大阪(伊丹)⇄秋田 ANA/JAL 80分(JAL)、95分(ANA)

札幌(新千歳)⇄秋田 JAL 55分

<ANA> 0570-029-222 <JAL> 0570-025-071

- 秋田空港から秋田駅西口へはリムジンバスで約35分。
- 県北方面へお越しの際は 大館能代空港のご利用もおおすすめです。



新日本海フェリー

北行 敦賀(10:00)⇒新潟(22:30)⇒秋田(翌5:50)⇒苦小牧東(17:20)

南行 苦小牧東(19:30)⇒秋田(翌7:45)⇒新潟(15:30)⇒敦賀(翌5:30)

- 秋田港から秋田市街へは車で約30分。(秋田中央交通バスのご利用も可能)

<秋田フェリーターミナル> 018-880-2600
運行スケジュールは必ずお問合せください。

藤本流 のんびり飛行機旅

伊丹空港から秋田空港まで、パビューン！とたったの80分。車で行けば900kmもある遠い秋田県が関西からもあつという間。そして空港から秋田駅まではバスで35分。って、飛行機はほんとすごいですね。その分、現地でのんびり。



高速バス

新宿⇄秋田 8時間30分(フローラ号)

仙台⇄秋田 3時間35分(仙秋号)

横浜⇄秋田 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号)

<秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)> 018-823-4890

<JRバス東北> 018-862-9461

- 秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。



自動車

仙台⇄秋田 約3時間30分

東京⇄秋田 約7時間30分

<日本道路交通情報センター(秋田センター)> 050-3369-6605

他県から秋田市へのアクセス

秋田新幹線こまち



東京⇄秋田 4時間

仙台⇄秋田 2時間30分

<JR東日本テレフォンセンター> 050-2016-1600

寝台特急あけぼの



上野⇄秋田 9時間35分

<JR東日本テレフォンセンター> 050-2016-1600

広川流 のんびり自動車の旅

北から南まで見所満載の秋田。どうしても色々な機材を持って写真を撮りに行きたくなくなってしまいます。そんなふうに荷物が多い時は車で試してみるのも良いものです。東北道から向かえば7時間半ほどで着きますし、時間に余裕があるのなら新潟経由で日本海を眺めながら北上していくルートも、のんびり旅を味わうことができますよ。



男鹿市

P43~ 男鹿 真山神社

【自動車】

秋田駅西口
| (1時間20分)
真山神社

【JR】

秋田駅
| (男鹿線 1時間)
男鹿駅
| (タクシー 30分)
真山神社

男鹿 真山神社

男鹿市北浦真山字水喰沢97
TEL 0185-33-3033

秋田市

P4~ 千秋公園・榎山 与次郎稲荷神社

【徒歩】

秋田駅西口
| (徒歩7分)
千秋公園
与次郎稲荷神社

【中央交通バス】

秋田駅西口
| (榎山南中町バス停下車/10分)
榎山
与次郎稲荷神社

千秋公園 秋田市千秋公園1-1 TEL 018-866-2112
(秋田市観光物産課)

榎山与次郎稲荷神社 秋田市榎山南中町6

大仙市大曲

表紙 大曲の花火

【JR】

秋田駅
| (奥羽本線 電車50分・新幹線35分)
大曲駅

【自動車】

秋田中央IC
| (50分)
大曲IC経由
大曲駅

大曲駅

大仙市大曲通町6-1
TEL 0187-63-3310

羽後町

P38~ 西馬音内盆踊り

【JR・羽後交通バス】

秋田駅
| (奥羽本線 電車1時間半)
湯沢駅
| (バス30分)
西馬音内盆踊り会館

【自動車】

秋田中央IC
| (1時間15分)
湯沢IC経由
西馬音内盆踊り会館

西馬音内盆踊り会館
羽後町西馬音内本町108-1
TEL 0183-78-4187

のんびり祭

NON-BIRI FESTIVAL

開催(宣言)!

秋田っておもしろい。秋田って楽しい。そんな私たちの実感を誌面を飛び出して実際に伝えたい!という気持ちから、とにかく「やるぞ!」ってことだけをまず決めた内容未定のお祭りです。なので詳細はHPやTwitterなどでご報告していきます。ぜひぜひ、10月末は秋田さ、け!(来てね!)

日時: 2012年10月27日(土)・28日(日)

会場: 1: 千秋公園与次郎稲荷境内及び、境内周囲 2: 秋田市にぎわい交流館Au
3: ならやま日曜はしご市(檜山与次郎稲荷神社) ※会場は変更になる場合がございます。

こんなことをやる予定です!

【絶対やる!企画】

第3回 寒天博覧会

「のんびり」第1号の特集記事から生まれた奇跡の企画。ただ固めてるだけではない! 秋田のめくるめく寒天の世界へようこそ!

10月27日(土)

11:00-16:00(仮)
@千秋公園 与次郎稲荷境内周囲

のんびり座談会

のんびりを知っていただくためのお話の時間。編集長藤本智士とその他ののんびりったちがフリーマガジン『のんびり』について語り、来場者のみなさんと一緒にトークします。

10月27日(土)

19:00-20:30(仮)
@にぎわい交流館Au

与次郎伝説 のんびりオリジナル紙芝居

のんびり編集部矢吹史子が企画している「ならやま日曜はしご市」にて、特集記事から生まれたあたらしい与次郎伝説の紙芝居を披露します。

10月28日(日)

13:30~
@ならやま日曜はしご市 与次郎稲荷

他にも、3会場のうちのどこかで...

【ほぼやる!企画】

のんびりグッズの 当てもん屋台

のんびりさんTシャツなど
編集部オリジナルグッズを販売します。

【きゅんやる!企画】

千釜冷菓の アイス屋さん

秋田名物「バラ盛り」の
アイスを楽しんで!

よじろういなり 寿司屋さん

特集記事で山形の与次郎稲荷に
お供えた、いぶりがっこ入りの
お稲荷さん。

じゅんさい 鍋っこ屋台

編集部オリジナルの
じゅんぱく鍋の屋台。

『のんびり』をお読みいただきありがとうございました。
アンケートにご協力ください。

『のんびり』は人を軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後取り上げてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。
抽選で『のんびり』のプレゼントをお贈りいたします。
応募メ切りは10月31日。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

※個人情報プレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の利用はいたしません。

のんびり web サイトから応募の場合

<http://non-biri.net>

ハガキで応募の場合

ハガキに

- ①郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス
- ②本誌の入手先 ③今後とりあげてほしい話題
- ④今号で面白かった特集(複数回答可) ⑤ご感想
- ⑥ご希望のプレゼントを明記の上、ご応募ください。

宛先は

〒011-0945 秋田市土崎港西 3-9-15-303
NPO法人 あきた地域資源ネットワーク内
あきたびじょん企画室 のんびり編集部行

プレゼント No.1

のんびりさん トートバッグ

秋田のイラストレーター、
スタタカミツのイラスト「のんびりさん」が
デザインされたオリジナルトートバッグ
です。

□縦 40 × 横 36 × 巾 13
キャンパス地の
ワンショルダーバッグです!

※実際のデザインは変更になる場合がございます。

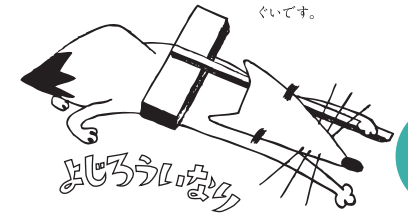


5
名様

プレゼント No.2

よじろう手ぬぐい

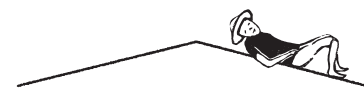
誌面に登場した紙芝居「よじろう
いなり」の本染めオリジナル手ぬ
ぐいです。



5
名様

「のんびり公式ウェブサイト」公開中!

<http://non-biri.net>



のんびり

2012.Autumn 02

2012年9月25日発行

STAFF

編集長
藤本智士 (Re:S)

編集

矢吹史子 (noon design box)
田宮 慎 (casane tsumugu)
笹尾千草 (cocolaboratory)
山口はるか (Re:S)

アートディレクション

堀口 努 (underson)

デザイン

澁谷和之 (澁谷デザイン事務所)

写真

浅田政志
広川智基
鈴木竜典 (R-room)

イラストレーション

福田利之
池田聖子
スタタカミツ
佐藤未歩

近藤康洋 (mel digital co.,ltd)

柴 瑠美子

プロデューサー

鏡 啓記 (NPO法人 あきた地域資源ネットワーク)

発行

秋田県
(観光文化スポーツ部観光戦略課イメージアップ推進室
Tel 018-860-1073)

編集

あきたびじょん企画室 のんびり編集部
〒011-0945 秋田市土崎港西 3-9-15-303
NPO法人 あきた地域資源ネットワーク内
Phone 018-816-0610
Facsimile 018-816-0611
Mail info@non-biri.net

印刷・製本

秋田活版印刷株式会社

* 乱丁・落丁誌はお取り替えいたします。
* 本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
* 本誌データは2012年9月10日現在の情報です。あらかじめご了承ください。

* 本誌は「あきたびじょん」コミュニケーション媒体企画制作業務委託
業務で制作いたしました。

© nonbiri all rights reserved.



Discover AKITA

Photo Tomoki Hirokawa

鹿島様

湯沢市岩崎字千年八幡神社